

## 四 戦闘と紛擾

(一一一〇〇—一六〇〇)

一一八六年鎌倉幕府の樹立は、古來の種族精神が復興したしるしであつた。即ち京都の朝廷貴族等の多感多情な心、又彼等の官僚的政治に對して起り、これを顛覆したものは、東國に於ける農民武士の間に残つてゐた質朴な思想、武勇の精神であつた。然しながら、此の政治上の大變化を経ても、儒教并に佛教と絶縁することは勿論出来なかつた。鎌倉幕府の新信仰は、武士の氣風に基き、各々の氏神を尊重し、儒教の忠義に關する教へと共に、佛教の理想に隨つて悟りを開くと云ふことを主義とした一種の折衷である。儒教の道德を武士の精神に應用すれば、自分一個なり、又氏族なりの名譽を重んじ、而して主君に對して忠實の徳を行ふにあり、此の忠實の教へと氏神の崇拜

鎌倉幕府  
とその  
信仰

とが相合して、武士道の基となり、この精神はこれより以後、七百年間の武士の道德を支配して來た。佛教の形而上的遍通の理想は、この新時代の精神に對しては、儀式や密儀で感化するのになしに、精神の修養、即ち悟道に依つて、簡明直截な感化を與へた。教理の宗教は實驗の宗教となり、信仰と直覺とが儀式制度に代つた。

十三世紀から十七世紀に至る間、戰國時代の信仰を支配した佛教には、三つの方向がある。其の一つは浄土門の信仰主義、禪の直覺主義、并に日蓮の豫言的宗教であつた。

浄土佛教は、平安佛教の感情的信仰に養成せられ、時勢の變化に心驚いた都人の間から出た。壯嚴な儀式を營み、華麗の生活を送る間にも、人事の無常を感じ、而して不滅の安樂を求める精神は、平安朝の末になるに従つて、段々旺んになつて來た。人の心は最早純朴な天然兒の心でなく、人生の問題

時勢の變  
化と人心  
の動搖



を深く考へ込むやうになり、繪畫や彫刻と共に、文學も亦佛教の厭世觀を取り入れた物が世に行はれた。慄れ求める感情と、不安の念とが相合したのが、平安末期の特徴になつて居る。此くの如くにして、社會生活にも、宗教上の儀式にも、外面の華麗な裏面には、不安と思慕との暗流が流れてゐた。平安朝の榮華を代表する藤原氏が、武家の爲めに壓倒せられるに及んで、此の暗流は表面に迸り出た。十三世紀の中頃に、色々權勢の争ひがあつて（保元平治の亂）、朝廷并に藤原氏の弱點を暴露し、藤原氏の勢力を奪つて、これに代つたのは、武人の平氏であつた。然るに、平家の榮華も、三十年の夢と消え失せて、これに代はつたのは源氏であつた（一一八五年）。今までの都びた奢侈生活の代りに、源氏の政治は、武斷的であつて、鎌倉に幕府を置いて、全國を支配した。この非常の變化は、其の因て來る所は久しいが、京都や西國の人々には、實に深い印象を與へ、今を盛りの櫻花が、一朝妬風の爲めに

散らされたやうなものであつた。詩人が此くの如く觀じたばかりでなく、他の人々も、眼前に此の變化を觀たのである。この政治上の革命と共に、今までの佛教本山は其の勢力を失ひ、信仰に對する要求は、今までのやうな儀式の宗教には満足しないやうになつた。其の結果は、淨土門の信仰となつて現はれた。

## 法然上人

この信仰の萌芽は、百年以來比叡山の中で段々に養成せられ、西方極樂の教主阿彌陀佛に對する信仰は、段々に信者を得、彼等は著作や繪畫や説教で、其の道を傳へた。信仰興隆の時機は熟し、其の要求は充滿して居た。此の信仰の勢力が、明かに表面に表はれたのは、この信仰の先導者である法然（一一三三—一二二二）の著作（撰擇集）を禁じ、次いで一二〇七年、その人を流罪に處したので明かになつた。政府が法然を流罪に處したのは、今まで教權の中心であつた、比叡山の彈劾に基いたものである。法然の傳へた信仰は、末法五



濁の衆生に、救ひの一門を開き、何れの人も、阿彌陀の救済願力を信じて助けられると云ふのであつた。彼は一切の智慧をも修行をも捨て、一切の密儀修法を無用とした。阿彌陀如來の名を唱へさへすれば、其の慈悲に接せられると云ふ教へは、無量壽經に依つて建てたもので、法然自身は、此の信仰に依つて、自らも信心の安樂に入つて、『譬へば、重き石を船に載せれば、沈むことなく、萬里の海を渡るが如く、罪業の重きことは石の如くなれども、本願の船に乗りぬれば、生死の海に沈むことなく、必ず往生する也』と教へた。又彼れは神祕詩人の調を以てこの信を歌つた。

さへられぬ光もあるを、おしなべて、

へだてかほなる朝霞かな。

月影のいたらぬ里はなけれども、

ながむる人の心にぞすむ。

此くの如き感化の力で、多くの人は、此の教に歸依し、榮華の生活が俄かに消え失せたに心驚いた貴族や宮女、戦場のかげひき、殺伐の仕事に飽いた武人、宗教の外面では満足もせず、真心の信仰を求めて居た人民、これ等が皆共に其の門に入つた。法然の信仰には、平安朝の纖弱な感情を傳へた點が多く、其の爲めに、武人の精神と相容れない點もあつた。然し、それと同時に、この信仰は武人の殺伐な氣象を和らげ、殺戮鬭争に心穩かならぬ武人に對して、安慰を與へた事も少くない。武士の中には、戦ひの中にも珠數を手にし、戦場の喚叫の中にも、彌陀の名を唱へて死んだものもある。法然の高徳な人格と、其の簡明な教へとは、西方極樂の光が、人界に漏れて來た如き感がある。

法然の弟子には、立派な人が多かつたが、其の一人と稱せられる親鸞（一七三—一二六二）は、この教へを一層平易にした。彼の教へでは念佛唱名の



數を重ねるに及ばず、彌陀來迎の印しるしなくとも、極樂に往生すると云ふ。往生は徳でなく信仰の力である、其の信仰も、彌陀如來から賜はる他方の信仰である。親鸞は、多く東國に傳道をして、眞言其他の佛教者を感化し、其の後彼の信徒は、北國に擴がり、今日は眞宗と稱して、日本で最大の宗派となつて居る。

日蓮上人

淨土門の宣傳に續いて豫言者が現はれた。十三世紀の中頃に、蒙古人はアジア大陸の殆ど全部征服し、支那の帝王となつて、この島國をも脅し始めた。これに對して、國中の恐怖周章は非常なものであつた。これを機會にして國民を警醒しやうとした豫言者は、即ち日蓮（一二二二—一二八二）であつて、國民が眞の信仰に歸らなければ、國は蒙古の爲めに亡ぼされると警告した。其の所謂眞の信仰とは、法華經に基いた教理であつて、彼れの教へはこの經の題目を唱へ、それに依つて眞理を崇敬するにあり、法華經の題目は、即ち

佛陀の精神を籠めた眞理であり、三身即一の佛陀は、唱題修業の信仰に現はれて來ると云ふ。佛陀に歸れ、この主義を貫き、且つ日本國は、此の眞信弘通に先天の約束ある國だと信し、豫言者の熱誠な叫び聲を放つて、政治並に宗教の執權者に反對を表した。此に於て彼は妨害侮辱に續いて、鞠問迫害を受けたが、これ等は益々其の熱誠を高め、法華經に説いてある弘法者の多難多怨の一生を己れの身に引き受けて經驗し、この教に對する信仰を強めるのみであつた。其處で終に佐渡の國に流され、在島三年の間に、愈々自分は末法の世の中に、法華經の修業者として現はれるべき聖人があると云ふ、法華經の豫言に應じて、現はれた導師であると信するに至つた。且つこの在島中にこの妙法の本尊たる法式を定めて信仰の中心とした。その時の教へに云つてある。

日蓮末法に生まれて、上行菩薩の弘め給ふべき所の妙法を粗ぼ弘め、つく



りあらはし給ふべき本門壽量品の古佛たる釋迦佛、迹門寶塔品の時涌出し給ふべき多寶佛、涌出品の時出現し給ふ地涌の菩薩を先づ作り顯はし奉ること、予が分齊にはいみじきことなり。……地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人也。……此く思ひつ付けて候へば、流人なれども喜悅はかりなし。うれしきにも涙、つらきにも涙なり、……現在の難を思ひつづくるも涙、未來の成佛を思ふて喜ぶにも、涙せきあへず。鳥と蟲とは泣けども涙落ちず、日蓮は泣かねども涙ひまなし。この涙世間の事に非ず。但偏へに法華經の故也、若し然らば甘露の涙とも云ひつべし。

日蓮の熱  
禱と感化

斯くて三年の後に、赦免を受けて鎌倉に歸り、尙ほ一度幕府に警告を與へた後に、俄に聲を潜めて、甲州身延の山中に退隱した。これより其の入滅に至るまで、八年の間、山中に立て籠つて、弟子の信仰を養ひ、この國民且つは末法萬年の衆生の爲めに、祈りの生活をし、遂には佛教が日本を中心とし

て世界を統一すべき準備をした。彼の信仰では、此くの如き世界統一は、日本國民の天職であり、又此の法華經の行者が住まふ身延の山は、靈鷲山の淨土を移したものとて、此處に死後の準備を整へた。彼れの信者となつた者は、都の文明に觸れない純朴健剛の人民であつた。彼等はこの教へに於て、彼等の愛國心武士魂に高尚な基礎を得たのみならず、又彼等の現世以上に亘る理想が、これに依て果さるゝを信じた。世界的宗教の統一を遂げやうとする日蓮の考へは、事實にはならなかつたが、其の豫言的熱誠と、迫害に對する忍耐は、其の弟子の間に、同じ氣象の感化を與へた。弟子の一人は、海外布教の途に上り、遂に其の跡を失ひ、其他の弟子も、日本國中到る所に布教して、信仰の爲めに死を遂げた者も少くない。日蓮は日本宗教史上、豫言的熱誠の唯一の代表者であつた。

信仰の覺醒が此くの如く起つて來たに加へて、尙一つ新勢力が加はつた。

禪佛教の  
輸入



それは禪佛教の輸入であつて、榮西(一一四一—一二二五)と道元(一一〇〇—一二五二)と二人が、其の宣傳者であつた。禪佛教のこの二派は、其の修業の精神に幾干かの違ひがあつて、榮西の方、即ち臨濟禪は支那的に詩的趣味を帯び、道元の曹洞禪は、實行的又倫理的であつた。然し兩方とも、禪を修して人生の紛々を脱する直截簡明の方法を教へた。元來禪と云ふのは、佛教修業の三學、即ち戒定慧の一つであつたが、佛教の一派で、殊に禪即ち定を重んじ、これを修業する方法を整へて來た。この佛教は、支那で道教の自然主義と結び付き、揚子江地方の詩的趣味に結び付いた。この座禪方法を宗教として見れば、禪定を修する者は、これに依て自分の精神に最も深い本來の面目を發揮し、個人の區別を滅殺し、有爲轉變の世相を超絶する。これを哲學的に整へて云へば、禪學は、一方には空理空想のやうであるが、又これを道德に當て嵌めて見れば、禪の精神に依つて、この世界の變化におはて

ずに活動する、これが禪の精神である。この精神を貫いて行けば、其の力に依つて人生の活動に處し得る。生滅を超絶した不變の實在性は、個人の差別以上であるが、この實在を己れの精神に體得した以上は、又これを活動や藝術に表し得る。この精神からして、詩と繪との天才を禪の感化の中に輩出した。此くの如く、禪は相反對したやうの分子を合はせ、理想主義と實際主義、無差別主義と個人主義、超絶主義と實證主義など、皆一つになつて居る。然し此等の混合は、つき合はせや偶然で出來たものでなく、印度の觀念主義と支那の自然主義とを合せて、これを日本人の實行的精神で鍛へたものである。精神的大悟の宗教としては、禪は己れの心を絶對に没し、絶對を己れの心に收めるにある。此くの如き修業に依つて、人の心は自由になり、大きくなり、悟りを得て差別相を脱して見れば、其の眼に映する天然は、色彩や活動を抜き去つて、靜かな光の中に融け去る。然し禪は、單に寂靜主義でなく、心が此



くの如き悟りを得ては、人生の憂苦煩悶に障へられない様になり、随つて如何なる面倒や非運にぶつゝ、かるをも辭しない。禪の悟りを得た人の精神は、石柱の風に吹かれて立つ如く、又は巨巖の波に逆つて動かないに似て居る。静かに諦觀し、斷乎たる決心を以て、人生と其の戦ひの中に飛び込むを辭しない。この諦觀、諦めは、力なしに失望した結果でなく、静かに考へ、堅く自ら決する所ある爲めである。この立場から觀れば、道德の生活は、目的でなく精神修養の力を試し見る試金石であり、若しくは又悟りを人生の活動に用ひる必然の結果である。

此くの如き禪の理想を應用して、この修養は武士の種族精神と、儒教の人的興味と、佛教の觀念的宗教とを結び付ける結び目になつた。己れの人格が本來の佛性を備へて居る事を自覺しては、名譽と云ふ觀念は、廣く又高尚な意味を得て來た。諦觀から生ずる道德の實行は、武士の徳である服従の精神

に活氣を與へた。其の外、又天然に對する感じは、發達して美の宗教となり、天然四圍の事物も日常生活の事柄をも、靜かな禪定靜觀の中に收めて了ふ。此等の理想や教へを、武士の生活に應用して、所謂る武士道の精神が出來上がつた。然しながら、此等の觀念や實行は、其の精髓に於ては、武士のみに限らない。萬法一如と云ふ廣い觀念、個人以上の天職に對する服従、理想の爲めに己れを犠牲に供する精神、劇烈な活動に處しても失はない靜觀の心、此等は日本人が、其の祖先より遺傳し、階級や職業の區別なしに得て來た禪の修養の結果である。

法然の信仰主義、日蓮の豫言的精神、禪の直覺主義、此等に於て、日本の佛教は其の特色を發揮して來た。この新機運の興隆は、國民的自覺の成長と相伴つて、何れの方面にも、國民の生活に影響を及ぼした。有難涙の信仰の結果、極樂淨土の有様を眼前にする者もあり、寂靜の觀念裡に、天然萬有や山水



草木を収めるもある。此等は詩と繪との好題目となつた。琵琶法師は悲壯の調に合はせて源平の盛衰を歌ひ、悲哀煩悶を脱し得た男女の運命を歌にした。今までの教師は、教理の議論を漢文で書いたが、此頃の人は、其の書簡や和讃を優美で而かも力のある和文で書いた。寺院と邸宅と、僧院と百姓家とは、益々近づき、通俗の教化はむつかしい哲學論に代はり、人事に關する助言助力は、密儀修法に代はつて傳道の方法は、茲に一變した。茶、扇、掛物、書畫、日本人の笑ひ、感情を現はさない顔付、此等の事柄で、外國人から日本の特色として批評を受けるものは、直接なり、間接なり禪の影響として生じたものである。

鎌倉幕府は、鞏固に天下を治めたが、其も百年にして亡び、これに續いて政治上社會上瓦解の時代が來た。この戦亂の世は、一三三〇年から一六〇〇

社會の瓦解  
と佛教の紛亂

年頃まで續いたが、其の間は又宗教上にも争ひの時代であつた。親鸞の信徒は、殊に中國から北國に擴がり、其の本山である本願寺の法主を戴いて、殆ど治外法權的の別社會を造つた。比叡山、高野山、其の他佛教の中心は、僧兵の根據となり、寺は城廓の如くなつた。日蓮の信徒は、熱烈の傳道を行ひ、到る所に他宗と争つて、遂に戦争を起した事もある。宗教團體は、何れも皆武装をして、互に戦つたのみならず、諸侯をも相手とするを辭しなかつた。此くの如き混亂の中では、又あらゆる異論奇説も行はれて、各宗分裂の勢は益々甚しくなつた。この時代に、文學を保存し、人民を教育し、厚生之道を興へたのは、禪の寺院であつた。

今までは、佛教に掩はれて居た神道も復活して、其の組織を整へやうとする者も出來た。南朝の忠臣たる源親房(一二三五年薨)は、日本の神話と佛教の宇宙論とを一つにし、それに依て日本は神國であり、天皇の御位が神聖で

足利時代の  
神道の



ある事を證明しやうとした。この點に於て、親房は、この後に出て、維新の事業を贊助した國家主義神道者の先驅となつた。卜者の家であつた卜部家は十五世紀に神道一派を樹て、兩部神道に對して、惟一神道と稱した。惟一とは稱するが、其の實は傳教の佛教哲學と道教や、其の外雜多の分子を合はせて造り上げたものである。此の一派の書物の中には、所謂神る五部書など云ふものがあつて、其の中には立派な哲學の議論もあれば、儀式に關する奇妙な説明も混じて居る。其の外、神道一派で、外宮神道と稱するものがあり、世に現はれたのは、後の時代にあるが、其の起源は十六世紀にある。此の派の説には儒教分子が多いが、其の倫理の方面よりは、寧ろ宇宙論又は易の分子が多く、神道を教理に整へた此等の人々は、隨分書物を澤山書いたが、其の勢力は著しくない。

この紛擾に加へて、十六世紀の中頃に、不意の客が殖ゑた。即ちイエス

々の傳道師が、日本に來て、忽ちにして澤山の信者を得たが、其の成功は、半ば彼等の同國人であるポルトガル人やイェスバニヤ人が、輸入して來た鐵砲の力であつた。大名の中には、此の武器を輸入すると共に、新宗教に歸依した者もあり、彼等は、この武器を以て他と戦ひ、或は社寺を破壊した者もあつた。天主教傳道師の献身的精神、世界的教會と云ふ觀念、又人を救ふ爲めに人間となり、其の身を十字架の上で殺した神と云ふ信仰など、此等は人の心を深く動かした。然し不幸にも、この傳道は、政治の紛擾と結び付いた爲めに、其の宗教の高い理想も曇らされた。天主教傳道の隆盛は、京都に於ける永録寺の建立（恐らく一五六八年）で其の頂點に達したが、これは信長のお蔭であつた。信長は佛教の敵として、常に僧兵と戦ひ、この新傳道を歓迎したのは、彼れの政略であつて、彼れは自分の安土城内に神學校をも建てた。此の頃天主教の信者は、二十萬近くもあり、其の中には大名も少くなかつた。



然しこの盛運は、一五八二年信長の死と共に一轉して、其の後秀吉は、此等の信徒の頑強な者を放逐し、徳川時代になつては、益々これを壓迫し、一六三八年、天草の叛亂鎮定と共に、全然これを禁止するに至つた。イエスイタ傳道師の來たのも不意であり、其の成功も一時驚くべきものであつたが、彼等の事業は、彗星の如くに此の國から消え去つた。後に残つたは、彼等と呼ば切支丹破天連 (Christian Padres) と云ふ名のみであつて、此の名は、近頃までも、一般人民の間には、何か恐しいものゝ如く耳に響いて残つた。此の如く、キリスト教は非常の迫害を受け、二百年以上禁せられて居たに拘はらず、長崎近傍には随分多數の信者が隠れ残つて居て、十九世紀、天主教の教師が再び來た時、始めて現はれて出た。

宗教覺醒の機運で光榮ある始めを成したこの時代は、遂に宗教が政治や戦争に引き入れられる哀れの終りを告げた。然しながら、此間に國民の心に播かれた信念は、今尙残つて居、今後其の力を新に發揮する時があるに違ひない。



## 五 平和と惰眠

(一六〇〇——一八六八)

徳川幕府

十七世紀の始めは、日本の歴史で、何れの方面に於ても變化の時であつた。國民は、漸くの事で戰國時代を脱れ、喜んで將軍大名の壓制政治に服従した。徳川幕府の宗教に關する政策は、佛教各派の現状を維持するにあつて、一方にキリスト教の防禦として、宗門改めと云ふ特權を佛教に附與した。佛教各派は、各々自治の自由はあるが、其の勢力範圍を變更する事は許されない。此くの如くにして、佛教の寺院は、特權と財産とを得、安樂の中に眠り始めた。

儒教と武士階級

幕府の政治の中で、思想の方面に重大なるは、儒教を徳育の機關とし、總べて教育を寺院の手から離した事である。幕府の採用した儒教は、十二世紀の哲學者朱子の學說に基いたものである。其の學說では、服従と云ふ事が最も大切な徳であつて、其の教へは、封建時代の政府に最も適したものであり、中央政府のみならず、各大名も、平和を維持し秩序を立てる爲めに、熱心にこの教へを興した。士分は皆この徳教の教育を受け、義を尊び、身を修め、家を齊へ、國を治める修養を爲し、此くの如くにして、武士の學問と心得とを鍛へ上げた。先きにも云つた如く、武士道は元來武士階級の道德と禪の觀念主義と結び付いて生じたものであつて、戰國時代には、個人的の道德教であつた。然るに今鞏固な政府の下で、平和の世には、この理想にも變化を及ぼさざるを得ない。昔の武士は、實際戦ひの人であつたが、今は武器を持つて平和を維持する役目をする。戰場で功名をする望みはなくなり、彼等の義務は、各々其の領地を治め、其の統一と秩序とを保つにある。此くの如く、事情が變化したにつれて、武士道は個人の修養から、轉じて社會的政治的道德



の教へとなつた。即ちこの新時代の武士道は、ストア學派と能く似て居て、人道は天理に基くと云ふ儒教の根本に立ち、天理は天地の秩序に現はれ、社會生活の中には長上の權威として現はれる。禪の修養から出て來た武士道は、此に於て、嚴格な修身の教へ、并に義理を重んずる公德養成の道となつた。此くの如きストア主義、實證主義は、自から宗教的信仰には反對する。儒教には宇宙論や形而上の論がないではないが、其の重きを爲した點は、道德の實行にある。此に於て、儒教者の中から、佛教の理想主義に對して批評を加へる者を生じ、佛教は、日本に來てから始めて反對の批評を受けた。徳川時代を通じて、大抵の儒者は、皆佛教に反對したが、それは要するに、禪宗の教へを空理とし、又一般人民の信仰を迷信と貶しての事であつた。この氣風は、武士の間に普く及び、其の結果は維新の際に最も能く現はれ、今日に至るまで、教育社會に遺傳してゐる。

儒教の  
一般  
と  
人民  
の  
陥

儒教倫理の長所は、政治上の道德、社會的公義の教へ、并に修養の整つたにあるが、其の缺點として、形式主義に傾き易く、それが極端になつては、個人の權利を無視し、其の要求を壓抑して丁ふ。この形式主義の濫用は、武士の間でも、表面と内心とを異にする偽善を生じ、又武士に對して市民（即ち男達）の反抗となつて現はれ、又文學の中には、義理と人情との衝突から來る悲劇となつて現はれて居る。武士道の形式主義と連關して、一般人民の教育は、甚だ低い状態に陥り、又商人を輕蔑する氣風にもなつた。武士社會の修養徳教は、人民を教育する力を缺くのみならず、彼等を盲従せしめる方が、治者に取ては便利であつた。農業は國の基として尊ばれたが、農民百姓は、米を作る勞働者たるに過ぎず、商業は殆ど詐欺の職業の如く、商人は唯利を貪るものとして、卑しめられた。此の如き社會の状態であるから、一般の教育は、寺小屋のみに委せ、讀み書き算術を教へる位に止り、又道德上の



事は段々腐敗して来る僧侶の手に委せるのみであつた。其處で、この缺點を救ふ爲めに、十八世紀の中頃に、一つの徳育運動が興り、簡単な教へで道德の實行を促すやうになつた。この運動は心學と云ふ名で、心を修め身を修める修養と云ふ意味である。其の教へに依れば、人間の心は、天理に基き、人の道は天の道を模倣するにある。恰も鏡を磨いて塵を取り去れば、何物をも能く寫すが如く、我々の心も、其の本源の良心、天性に従つて考へ、又動けば、眞の道を得る。信實、謙讓、孝悌、此等の徳は、心學修養の方法でもあれば、目的でもある。此くの如き教へを傳へた人は、儒者もあれば、商人もあり、皆立派な人格を備へ、さうして平易の教へを通俗に講釋し、何れの人をも引き入れる力があつた。この運動は、殊に商人社會に勢力を占めて、幕府の末まで大に榮えたが、時代の變化と共に、今日の商人社會には適しない爲めに、終に衰へた。

商人社會の心學に次で、農民の間に感化を及ぼしたのは、所謂報徳教である。其の教へは、天地の恩徳を感謝し、つゝまやかな生活をして、人の道を修めるにある。この道德の教へを經濟の實行と一緒にして、農民の間に感化を與へたが、其の勢力は、農民の間には今日も尙残つて居る。心學と報徳教とは、感化の方面を異にして居るが、其の教への性質は、能く似て居て、神儒佛の三教の何れにも偏せず、謂はゞ各宗教の精髓を捉へやうとし、而してこれを生活の上に實行するを主義とした。其の上、この二つの運動は、時代の特色を現はして、寧ろ消極的の傾きを持つて居る。即ち身を處するに謙遜の徳を守り、長上に對しては偏に服従の心を養ひ、進んで取ると云ふよりは、退いて守る方が主になつて居る。

佛敎は國家の保護を受けて、安樂の中に平和の眠りを貪つたが、其の中にも活動はあつた。即ち佛敎の典籍が段々印刷になつたのも、この平和の時代



にあり、教理の問題を研究し、宗義の論は精細の點まで整つた。此に於て、教理の正統説を主張する者と、異端即ち異安心者との争ひは、度々起り、其の決定に政府の干渉を求めなどして、官吏が教理の問題を決定すると云ふ滑稽をも演じた。殊に面白い事には、十三世紀に信仰を標榜して興つた浄土門の人々が、最も多くこの争ひをした。

儒者の間には、多くの人才が出、其の中には多少獨創の學説を出した人もある。これは朱子學派以外の方に多いが、大抵皆嚴格な道德修養を主張し、又形而上的の理想主義に反對する點に於ては、何れも一致して居た。然し此等儒者の争論は劇しくなつて、政府をして異學の禁を發せしむるに至つたが、この禁も十分の効力はなかつた。然し儒教者が佛教に反對する點に於ては、殆ど學派の別はなかつた。

佛教に對するこの反對に加へて、尙唯一の勢力が起つて來た、即ち神道の

儒教中の  
異流

神道

復興である。この神道者の中には、武士であつて儒教主義から出た者がある。彼等の信仰は天理に従服にして、これを忠孝に行ふにある。各々君主に對するのみならず、皇室に對する忠義を重んじ、又孝行を祖先崇拜の形で行ふから、其の點で日本の古傳に結び付き、神道の信仰に入り、又其の儀式をも行つた。此くの如くにして、幕府が徳育の根本にした儒教の中から、神道主義が出て、其の結果は幕府を倒して、皇室の權威を回復する力になつた。

神道復興の他の分子は、即ち國學者であつた。日本の古典に關する研究は、其の始め佛僧の中から始まつたが、其の研究は所謂國學者の手に移つて、祖先以來の宗教を、彼等の信する元の形に回復しやうとした。彼等の神道は佛教や儒教の混合はなかつたが、其の中で最も傑出して居た平田篤胤（一八四三年死）は、西洋の學問に觸れて居た。彼れの主張に依れば、天地の支配者、天御中主は、北極星の所に座を占めて、天地を支配し、其の下に居る神

國學者の  
神道



神は、人類、其の中でも殊に日本人の爲めに、神助を與へる。即ち彼れの考へでは、世界は圓いもので其の頂上に北極星があり、日本は其の直下にあると云ふ。其處で總べての宗教道徳は、最初日本に出たもので、他の宗教はそれを變化したものだと言ふ。然るに、日本人は、その太古に宗教の教へを整へたことがないが、此は至當である。即ち日本人は天神の直系子孫であつて、神代以來、清淨無垢の人民であるから、それを導く爲めには、別に組織立てた教へを要しなかつたと云ふ。平田の考へでは、世界の宗教は、神道が間違つて傳はつたものであるから、日本人の天職はこの間違ひを除き、神の道を根本に回復するにある。此の點に於て、平田は今までの神道家よりも眼界が廣く、殊に外國分子を排斥する點に於て、最も劇烈であつた。此等の神道家の感化は國民の心情には入らなかつたが、彼等は王政復古に大切な力を與へたから、彼等の考へや提案は、次の時代の教育に影響を及ぼした。この爲めに彼等の國家主義と宗教心との關係、并に新時代の變化に對する衝突、此等の困難を、今日に残す一つの原因を作つた。

所謂  
俗  
神道

神道復興に就て、尙ほ一つ注意すべき事は、此の時代の最後百年の間に、信心深い神道家の出た事である。此等の人は、自らも神道家と信じ、世間も斯く見做して居るが、彼等の信仰は、日本の古傳のみから出たものでなく、多くは其の人々獨得の信心經驗から出たものであり、其の信仰は殆ど一神教に近く、それに秘法修行が結び付いて居る。此點に於て、彼等の宗教は古の神道と離れない。此等の神道家の中で、最も著しいのは、黒住宗忠（一八四九年死）であつて、彼の信仰は真心を以て貫き、殆ど一神教の風を帯びて居る。其の神は即ち天照大神であつて、萬物に生命を與へる神、又我々の心に對して直接に力を與へ徳を與へる神であるから、此に對する誠心が即ち宗教である。



## 六 新時代、覺醒と混亂

(一八六八年以後)

復古と開國

一八六八年、王政の復古は時勢を一變した。國民は長い平和の眠りから覺めて見れば、周圍には十九世紀の新文明が、光り眩ゆく輝いてゐた。復古と開放とは、人心を動かし、社會の組織に動搖を與へ、保守氣風と進取の氣象との混合紛擾は、國民生活の有らゆる方面に表はれて來た。維新の始め發布せられた五ヶ條の御誓文は、國民の新生活に對する覺悟と大望とを宣明して、天地の公道に基き、人道の基本に立つて、庶民に至るまで、各々其の志を得しめよと云ふ主義であつた。然しそれと相對して、國民を一つの信仰に纏めやうと云ふ專制的手段も行はれた。頑固な神道家と儒教主義の武士とは、政治上の變革に續いて、直ちに國教を建設しやうとした。即ち新政府の

祭政一致  
致と政教一

首には、神祇官を置いて、國民の精神から、佛教其他の感化を排斥しやうとした。佛教や僧侶に與へてあつた特權は、一切これを沒收し、兩部の神社から僧侶を放逐し、偶像、裝飾、經文を取り出し、これを火に投じた。火葬の如きも佛教から來たものであるから、これを禁じた。千二百年以來、佛教と混合して居た神道は、此くの如くにして、異分子を除き去つた。神道を國教とした事は、實利の方面に於ては、佛教に對する大打撃であつたが、其の損害は、精神上の覺醒で償ふべきであつた。變革の後、政治状態の不安であるのと、佛教家の熱心な運動の結果、政府は其の方針を變へて、所謂大教院を建て、神道家も佛教家も、其の監督の下で天理人道に基き、愛國の教へを説く事になつた(一八七二年)。此に於て、二つの宗教は、先づ同等の位置に立つた。其の後三年でこの制度も廢止となり、佛教の宗派は各々自治を許され、神道は朝廷の儀式を離れて、別に宗教團體を組織するやうになつた。與



奮的な神道復興は、一旦勢力を揮つた後に、鎮まり、信教の自由は、事實上認められる事になつた。

同じ年（一八七五年）、キリスト教の進歩に就て、著しい事が起つた。即ち新島襄がアメリカから歸つて、同志社を創めた事である。是より先き切支丹の禁制を撤去して（一八七二年）以來、青年でこの教に改宗した者は、所々に集まり、彼等自からと共に、同胞の目を覺まさうと云ふ熱心を以て運動した。彼等の或る者は、親戚友人の猜疑心に打ち克ち、親の脅迫にも抵抗して、彼等の信仰を貫かうとした。此等の熱心家は、新島の人物に於て彼等の中心を得、其の許に集まつた。新時代の始めに於ける福音傳播の進軍は、立派なもの、八十年代の末に至るまで、其の進歩は著しいものであつた。キリスト教の傳道學校が、此の間に成した事業効果には、中々大切なものがある。キリスト教が此くの如くにして蒔いた道德觀念の種は、今其の實を結び、

殊に男女關係の點で力を現はしつゝある。新教の宣教と共に、天主教并に正教の布教は、段々下層社會に及んだ。全國民がキリスト教になると云ふ事も、單に夢ではないと思はれた。然しながら、これは表面の流れであつて、其の裏には、不可知論と保守的反動との暗流があつて、それが遂に表面に現はれて來た。

## 保守的反動

維新の初め開國に反對した人々は、其の後反對の極端に走つて、何事でも西洋の事ならば善良な物だと考ふるに至つた。鐵道や電信と共に、ルソー、ミル、ベンサムなど何かなしに歓迎せられた。キリスト教、殊に新教の興隆は、其の一部分は、時代の西洋心酔のお蔭であつた。然し國民的觀念はなくなつたのではなく、八十年代の終りに、條約改正の問題に續いて、排外精神が起り、反動は宗教の範圍にも現はれて來た。キリスト教反對の運動には、佛教者が先導となり、神道家、儒教者など、保守的の人々は、日本國教を打ち



建てるに云ふ團結を結び、或は尊皇奉佛大同團、或は國粹保存と云ふやうな旗幟の下に集まつた。彼等は今までの不和を忘れ、只管外教に反抗する爲めに同盟を結んだのである。これに加へて、青年佛教徒の中には西洋哲學を學んだ者が出來、ドレーバー、ルナン、スペンサーなどを手にして、キリスト教に當つた。この同盟は、一種奇妙なもので、保守的反動と不可知論と、近世科學と印度哲學との聯合であつた。然しこの時代のキリスト教は、此くの如き攻撃を受けても仕方がなかつたので、キリスト教信者の多數は、それが西洋人の宗教である、蒸汽機關を發明し、文明の言葉である英語を話す人民の宗教として、これを歓迎したのである。

この混合的反動に續いて來たのは、一層明白な國民的思想に基いたものである。一八九〇年發布になつた國民道德に關する勅語は、皇祖皇宗の遺訓に基き、國家の徳教を統一するにある。この勅語で國家的觀念を明にした點は、

國民的自  
覺

此に於て或る一部分の思想家には保守的思想を以て解釋せられ、キリスト教に對し、又一般に宗教的信念を排斥する方面に利用せられた。其處へ一八九四—九五年に、支那との戦争が始まつて、國民的意識に對する強い刺戟になり、又武士的精神の復興を促した。教育社會は、今までから宗教分子を排斥し來り、又教育者の多數は、武士の階級から出たものであるから、キリスト教と佛教とに對する攻撃から一步を進めて、國民の良心に對して一定の主義を注入しやうとした。神道家は此に於て佛教と分れた。此くの如き主義の團體組織は、勢力を得るに至らなかつたが、其の思想は教育家多數の思想を代表したものである。この主義の宣傳は、今後も新に力を得て來るに違ひない。

新日本の宗教問題は、此に於て一轉して、新舊の衝突或は佛陀とキリストとの違ひなど云ふ事から、宗教と無宗教との争ひになつて來た。國民の感化には宗教的信仰を必要とするか、又は學校の徳育だけで十分であるか、此の

佛教とキ  
リスト教



問題は、此頃以後、今日まで宿題として残つて居る。この争論が明白に現はれた後、又シカゴの宗教大會の後、佛教キリスト教など、宗教家の懇親會が開かれた（一八九六年）。この會での演説には、佛教とキリスト教は、共に手を携へて、共同の敵である無宗教に對して戦はなければならぬと云ふ、希望を言明した者もあつた。この會合は小範圍の事ではあつたが、日本の宗教問題に對する一轉機を示したもので、後年三教關係の問題も、茲に其の萌芽を示して居る。

教育家の中には、宗教に對する代用物を造らうと努め、宗教家の中では新方針に苦心して居る間に、一般人民の感化は、放棄の姿にあつた。佛教の僧侶には、自ら信仰のある者は少く、又昔から傳へて來た教へも、新に同盟を結んだ哲學も、彼等に新な活氣を興へるには足りなかつた。神道宗派の中で新に興つた者もあれば、古ので復興したのものもあるが、此等は大抵皆、國家

一般人民  
の信仰と  
迷信

の宗教としての神道には關係の薄いもので、一般人民の有神的信仰、或は禁厭修法の色々な種類を代表したものである。前時代からの遺傳的風習として、一般人民の間には、佛は死後未來の安樂の爲めに崇拜するものであつて、神は現世の事柄を守る事になつて居る。神佛の間の此くの如き分業は、下等社會の間では殆ど自明の事になつて、生きて居る間は、佛を捨て、置いて、どれかの神を崇拜する。此の種類の崇拜から、色々な神道宗派が出て來て、多少の組織を備へるやうになつた。其等の中で最も勢力を得たのは、天理教であつて、世界には根本の神靈があり、人間は正直にこれを信すれば足りると教へる。然しこの派の信仰には、色々な迷信や、曖昧な儀式が混合して居る。其の外一般社會の迷信的傾向は、戦争後經濟上の恐慌の起つたと共に、表面に現はれ、社會一般の精神状態は沈滞するに至つた。

これと同時に、青年の間には、宗教を求める心、或は宗教に對する考へ

求道の心  
と煩悶



が二つの極端で現れて來た。即ち懷疑的自然主義と感情的信仰主義との二つである。佛教の青年は、團體を組織し、其の中には理性主義から狂熱的傾向に至る種々の色別けがある。キリスト教の教會も、亦道を求める青年を多く引き付ける様になつた。宗教に關する論文、或は信仰修養の書物は、佛教の方でもキリスト教の方でも、益々多く出、古の佛教大徳の著作は、新版を重ね、宗教や哲學に關する講演は多くなつて來た。此等は信仰と眞理とを求める需要の、益々多くなつたしるしである。此くの如き求道には、心情の不安煩悶、腦髓の動搖不定が伴つて居る。今までからある宗教や、哲學又は倫理學說に對する、一般の不滿につれて、極端な議論や提説が段々に出て來た。トルストイ、ニイチエ、ケルケゴー或は又ヘツケル、マックス・ノルダウ若くは又イブセンなど、盛に傳へられた。此くの如き不調和動搖は、段々進んで來たが、其の紛擾の中で、ロシアとの戦争(一九〇四——一九〇五年)が

始まつた。

戦争の間、一時鎮まつてゐた宗教并に道德に關する問題は、戦後再び表はれて來た。新に得た勝利に對する國民の自負心、并に一層の進歩を確に得やうと云ふ大望は、戦後經濟の困難や、工業に關する難問とぶつかつて來た。

祝勝祝ひに續いて、武士道の讚美、家長制度に基いた古來の道德の弊説などが續いて出た。此等の保守的運動に對する反抗として、社會主義の提説や運動は、段々に力を得て、一九一〇年には、今まで日本に例のなかつた無政府主義の隠謀すら生ずるに至つた。其の外文學者の間には、西洋の自然主義或は墮落文學を喜ぶ者も多く、彼等の著作は、青年の間に悪感化を擴げつゝある。これに加へて、教育を受けた者が多く出來過ぎ、所謂高等遊民など云ふ問題も生じて來た。教育社會の保守主義と相對して、極端な思想は種々の方面に勢力を延ばしつゝある。



此等の紛々の中で、注意すべき事が、一九一二年の二月に起つた。即ち内務次官床次君は、國民一般に對して、宗教の勢力を強めるには、どうしたら好いか、又この目的の爲めに、總べての宗教の協力を促す方法は如何、と云ふ問題を出して、この爲めに、宗教代表者の會合を開かうと云ふ提案をした。反對の根據には色々あつたが、佛教者并に教育界の一部は、強くこれに反抗した。それにも拘はらず、神道、佛教、キリスト教の代表者は、これに應じて集まり、二度會合の後に、一つの決議をし、各宗教は各々其の本義を守り、主張を貫き、而かも互に尊重して、社會國家の爲めに盡くさうと云ふ意志を表明した。この決議は、漠然たるもので、抽象的の觀があるが、この會議が、三教の代表者并に其の信者に與へた印象は深いものがあり、其の結果は、今後何かの形で表はれるに違ひなく、國民の信仰と道德とに、好影響を與へるであらう。其の上、次官が大膽に提案し、政府と各宗派とがそれ

に一致したのは、四十年以來、政府の宗教に對して取り來つた政策に著しい變化を宣言したと同じである。政治と宗教とが、互に分界を守り、互に尊重すると云ふ主義は、茲に言明せられた譯である。今まで故意に又無理に、宗教を國民の生活から疎外して來た傾向は、この會が、政府并に教育者の一部分から歓迎を受けたるに依つて、一掃したに均しい。今まで猜疑の眼を以て疎外せられて來たキリスト教は、古來の宗教と相并んで認めらるゝに至つた。この會議は、今後一層廣くして行はれるであらうが、其の實際の結果は將來に待つ外ない。

此くの如く、問題は複雑で、混亂が激しいが、其中にも希望の光明はある。日本人の精神は、キリスト教文明を幾らか理會し、思想の徑路は西洋と同じ方向に進みつゝある。現代の日本人は、これを意識すると否とに係はらず、西洋文明の影響を受けない者はなく、宗教、道德、又社會的方面で、其



の勢力は段々に増して居る。最も保守的な神道家の中にも、彼等の古來の宗教を組み直さうとする者もあり、ペルシャ教の如き二元論の方向に進むか、或は又佛教キリスト教などの廣い考へを容れやうとする者もある。儒教主義の人は、西洋の實證主義或は不可知論に接近し、武士道は、徳川時代に儒教と結び付いた形で、教育者の中に勢力を廣げつゝある。この武士道は、禪の個人的修養と離れて、封建時代から傳はつて來た社會的徳徳と結び付き、又武斷思想の發達と共に、力を得て來た。此に於て、武士道論者は、工業組織の新社會に於ける道徳と如何にして調和し、現在行はれて居るロマ法の法律思想と、如何に關係すべきか、と云ふ難問に遭遇しつゝある。相反したこの二つの勢力が、如何なる解釋を得るかは、今日未だ見る事が出來ない。

現代の日本で、宗教現象の著しい事は、佛教とキリスト教との關係接近である。一例を取て云へば、キリスト教の贖罪と云ふ説は、日本キリスト教では、段々に罪を償ふと云ふ法律的觀念と離れて來て居る。キリスト教の中に

佛教とキ  
リスト教  
との相互  
影響

ある舊約書の排外的一神教は、天父に對する信仰の宗教となつて、其の氣風を和げつゝある。此等の變化は、一部分は、日本人の遺傳にある理想主義の廣い精神が與へた感化である。これと相并んで、青年佛教家の間には、佛陀に對する信仰を復興し、形式主義を脱した宗教を、自由に發達させやうと云ふ、眞面目な努力があるが、これは主としてキリスト教の信仰主義の方である。それと同じく、キリスト教信仰の實際的な方法は、佛教徒に刺戟を與へて居る。その上佛教徒の間に生じて來た歴史批評の精神と、方法は、今支離滅裂になつて居る佛教各派に、警醒を與へる時が來るであらう。

此等の混亂と困難とはあるが、日本の宗教は、過渡時代の紛擾を通り抜ける爲めに、其の道を通りつゝある。我々は、今まで幾多の危機に遭遇し、其の度毎に、其時の事情に應じ、新な信仰や觀念を容れて來たが、それと同じ

過渡時代  
の問題



やうに、現在の難關をも、遂には切り抜けるであらう。これを古に觀れば、我々の祖先の種族的道德は、儒教の助けを得て、組織ある忠孝の教へとなり、又佛教の方に依つて精神的融會の理想に進んで來た。日本人の宗教心は、忠孝と云ふ美果を結んだが、此の徳は、何時までもこの國民の觀念と活動との中心主義となつて残るであらう。それと同じく、天然に對する愛情、濃かな同情、或は又謙遜の徳、若くは廉恥の心、長い間養つて來た此等の徳は、容易には消滅しない。然しながら、中世紀の間に養つて來た萬法一如の信仰や衆生融和の理想は、如何にして、近世社會の競争組織と調和するか。家長制度の家族組織には、強味と長所とはあるが、それがどうして個人主義の潮流を抑へ得るか。理論并に實際の方面で、物質主義と觀念主義との争ひ、又教育、文學、社會生活の上にかける、宗教と無宗教との反抗、此等の點に於て、現代の日本は、西洋諸國と同一の難問に遭遇しつゝある。云ひ現はしは違

ひ、直接の争點は必ずしも同一でなからうが、東洋も西洋も、解釋すべき問題は頗る似て居る。要するに、我々自らの傳承と遺傳とを捨てず、又我々自からの遣り方に依つて、この過渡の問題を解釋し、かくて二十世紀の世界文明に、如何なる貢獻を爲し得るか、此處に我々の問題がある。



外篇第二

西洋文明の由來



この一篇は、明治四十三年七月廿八日から卅日に亘つて、三保講習會で、西洋文明に對する日本人の覺悟態度を定める參考として話したもの。僅に三時間で三千年の歴史を述べたのであるから、極めて概括的のものである。本論には、西洋思想のことや、現代文明の事に度々觸れて居るから、その方の參照として之を外篇の第二とする。

## 一 古代の文明

日本は昔から各國の文明を吸収し來つて、其の長所を發揮し、現代に於ては一千年來養つた東洋の文明を蓄へ、その上に新來の西洋文明を吸収し初めて居る。過去の成り行きと現狀とに鑑みて、日本人には東西の文明を融合し、統一する天職があるといふことは、誰も言ふことで、又直ぐに考へへのつぐこと、又吾々も大に其の任に當ることを覺悟しなければならぬ。併しながら、東西文明の統一、調節を圖るには、如何なる點で之をするか、又如何なる覺悟で之を仕遂げるかを定めなければならぬ。東洋の文明は既に吾々のものになつて居るが、西洋の文明を容れるに就ては、能くそれを領解し、その精神を汲み、精髓に入らねばならぬ。西洋の文明と云つても、長所もあり短所もあり、弊害もあるが、又非常に宏大なる理想もある。吾々はそれ等、諸の



方面を能く領解せず、唯調和するとか統一するとか言つても、それは空論に過ぎない。今日は、随分調和論者或は統一論者の中には、輕卒の考を有つて居る人がある。その考へでは日本は東洋の文明を元から有つて居、此の文明は精神的の方面に於て勝れて居、西洋の文明は物質的の方で勝れて居るから、西洋の物質的文明を以て東洋の精神的文明を補はう、斯ういふ考への人も大分あるらしい。斯ういふ東西文明の調節統一ならば、至極安上りで、都合が宜い、是で東西兩洋の統一が完全に出來たならば甚だ輕便でよいかも知れぬ。併しながら世の中はさうはいかない。

西洋の物質文明だけを受け入れやうとしても、なか／＼それだけでは止まらぬ。それと共に宗教も入つて來れば、哲學も入つて來、又商業や工業に伴つて實利思想も變化する。第一には經濟組織が變つて來るに従つて、工業の組織も變り、個人の手細工工業が工場機械製造と變る。今まで赤ん坊の傳

物質文明  
と精神文  
明

をしながら一家で働いて居つた者が、工場組織になつて、工場に通はなければならぬ。彼方此方に澤山の工場が起つて來ると、澤山の職工が各地方から入り込むで來る、そこで風儀問題も起つて來る。資本家と労働者との關係は、今日はまだ切迫して居ない様であるが、段々切迫する問題になりつゝあり、社會主義なども興つて來る。物質的文明だけを容れやうと思つても、それに伴つた色々の精神的又社會的問題も入つて來て、道德の方面にも變化を與へる。其等の元になつて居る精神の根本を解釋せず、唯だ物質の末だけを容れたならば、却つて弊害のみ起ることになる。其の外文學にしても、近來は自然主義の文學などが入つて、一時は大分盛に行はれた。さういふ自然主義などの入つて來るのも、社會の變化に伴ふ現象であつて、西洋文明の輸入と共に、生存競争が烈しくなり、従つて社會生活の變化が思想の上にも及んで來るので、つまり自由競争の社會組織と科學的文明の反面には又斯ういふ



ものが伴つて來る。物質的文明はそれだけ獨立したものでなく、精神的の方も必ず伴つて居る。西洋の文明は、日本の多くの人の想像して居る如くに、物質的の文明で秀で、居るだけでなく、その本質裏面には精神の方面に於ても多く教へるものがある、少くとも吾々の理想と一致し得るものがあるに相違ない。この根本を取つて來て、精神的に、根本の理想から東洋の文明と融和するのてなければ、本當の調和、本當の統一といふことの出來る譯はない。

それで此所に極く大體に就て西洋文明の由來を述べて見やう。或る人の言ふが如き安上りの東西文明の統一ではなく、根本的の融合でなければならぬから、西洋文明の由來に就て、その源泉を汲み、又それに照らして末の弊をも見たいと思ふ。但しヨーロッパの廣い土地に亘つて、數千年の間の歴史、或は其間に彼地此地に段々發達した美術、文學、宗教、哲學等の種々な方面

精神的融合

で、色々の變化が起つた跡を、僅三時間に述べるのであるから、極く概括したことであることは、前以て十分御承知を願ひたい。

ギリシヤ人の文明

第一に古代の文明を觀察しやう。西洋文明の由來に就いては、今の日本で教育家或は學者にしても、根本の事柄を忘れて居る人が多い。西洋文明の一番初めの起りは、ギリシヤにある。それより前は略して、先づギリシヤの人民は、一種奇妙な人民で、非常に自然主義が發達して居つた。尤も今日の人にも自然主義といふことは言ふが、少しく意味が違ふ。總ての事を自然に隨ひ、自然を尊んで生活を遂げる、此が即ちギリシヤ人の最も大切とした問題であつた。それ故に、彼等は自然の命する所に従つて、人生を貫く。人間は自然から身體を受けて生まれたのであるから、之を十分發達しなければならぬ。自然のまゝに圓滿に發達し、而して人間の特色を發揮するといふのが、

自然を尊ぶ



その主義である。其の主義は先づ第一に眼に見えるもの、形に現はれ、思想だけでなしにそれを實行しやうとした。是は一は國土の關係もあるので、地圖を見れば分かる如く、ギリシヤは半島國であつて、丁度日本の瀬戸内海のやうな風に、彼方此方に島があり、其の間には山が聳えて、非常に風景の良い土地である。さういふ國に住むで居たギリシヤ人は、同じ人種ではあつたが、各地に別れて居て、それが各々特色ある發達をして居る。それ故、その思想行動は、總て自由で圓滿な個人主義の發揮といふ方に向いて來た。

## 自由主義

此處にギリシヤ人の主義があつて、個人の特色を自由に發達する中に、一方には調和といふことが籠もつて居る。自由と調和とを十分に發達させて、それで善にして且つ美なる文明を造り出さう、人生を圓滿にしやうといふのが彼等の理想であつた。善と美、道德上の善と美術上の美を、人生の上に現して來る、之に依つて出來た人生が、美はしい人生である。そこで彼等は、其

の理想を個人の生活に行はうとしたばかりでなしに、小さな都會の共同の生活をした。小さな團體、即ポリスの自治政治に、此の自由主義を發揮し、自由の市民が相集つて共和政治を行つた。

共和政治  
の精神と  
神々

共和政治の精神は、又彼等が信ずる神々にも現はれ、彼等の信じて居た神は何れも亦人間的に完全な身體がある、又各々特質を具へ、互に相争ふ事もあるが、共に主神ゼウスの下で共和の生活をして居る。その中で、ゼウスは君であり、アポロは天上の神で、太陽として吾々に光を與へ、アテーネは吾々に智慧を與へる。それ等が皆共同して一緒になつて居る。それ等の神は又、各々立派な身體を有つて居る。アポロの如きは、若い男で、壯健な極く立派な身體で、何時も少しも衰へることがない。又この神に少し似寄つて居るのは、ヘラクレースといふ半神で、是は若者の勇者の標本であり、彼方此方へ行つて、人を助けるといふ。或は又アテーネは美術の神で、同時に又鎧を



着てアテナイの街を守護する神である。其の外には、又種々な神と人間の間  
 間のやうなものが澤山ある。それ等は總てのもの、靈とも言ふべきもので、  
 それが彼方此方を飛び歩いて、美しい姿を現はすといふ。そこで吾々人間も  
 亦オリンポ神山の神様の如く修行して、一藝一能に達し、又は智者になれば神  
 になれるといふ信仰がある。それ故に四年毎にオリンポの祭と言つて、祭を  
 行つて、ギリシヤ中で一藝一能に勝れた人が集まつて競技をする。其の中に  
 は音楽家もあれば、美術家もあり、學者もあれば技術家もあつて、その技を發  
 揮し、その中で一番勝れた人には、優勝のしるしを與へ、月桂冠を着け、紫の  
 着物を着せる。その人は即ち此の如くにして神の列に入つたもので、その人  
 を多くの人が圍んで故郷に送る。是が即ち神になつたしるしで、其人は神の  
 仲間入をして不滅になつたと信じて居た。今日からいへば、ギリシヤ人は美  
 術的であつたと言ふが、彼等の生活は美術的であつて、善なるもの、美なる

オリンポ  
の大祭

眞善美の  
實際化

もの、眞なるものを實際の生活に現はすといふ理想から出て來たのである。  
 それ故に彼等の哲學は、此の理想から來て居て、プラトーンは此の理想を以  
 て哲學を組織して居る。その見方でいへば、現象世界はそれ自身實在でな  
 い。それ等の美しく善いものは、皆ちやんと先天的にある觀念として具はつ  
 て居る。總て自然の善美は、只それが現實に現はれて居るだけのものとなし  
 に、天上の觀念世界に具はつて居る。人生は即ちこの天上の善美を實現する  
 場所である。吾々の生活は、現實の生活の美しいものを段々發達するにあつ  
 て、而かも現在の状態は消えて了ふのではなく、その中に天上の生活を自由  
 に發揮すべきである。ギリシヤ人が天然を尊んだ自然主義は、プラトーンの  
 思想で天上と聯絡を保ち、個人の自由を重んじた氣風は、萬人萬物皆各々そ  
 の觀念を發揮すべしといふ事にあつた。

ギリシヤ人は、斯ういふ理想で何事をも行ひ、宗教、美術、技藝、總てを

プラト  
ン哲學の  
歸着



ヘルシヤ  
戦争

此の如き美はしい理想に基いて築き上げ、燦爛たる光を放つた。又彼等は此の理想に依てヘルシヤの大兵を撃退した。ヘルシヤの王ダリオが、多数の兵を以て世界の總ての國を征服し、専制の君主として世界を支配しやうとしてギリシヤにも侵略して來た時に、ギリシヤ人は飽くまで之に反抗した。吾々ギリシヤ人は此の如き専制の君主に服従すべきでない、吾々は自由の民である、此の如く兵馬の力のみを以て世界を屈服しやうとする者には、飽くまでも抵抗しなければならぬといふ意氣込でヘルシヤの大軍と戦つた。此の戦争は非常に大きな戦争で、其の最後にはサラミスといふ處で戦つた。是は日本で言へば日本海海戦のやうに、敵の艦隊が皆此所に集まつて來た。ギリシヤは小國であり、敵は大國であつたが、國中の者が一致して、此の大敵を破つたのである。ヘルシヤの王は數千の艦隊を率ひ、戦勝の餘威を振つて、小國ギリシヤに迫つて來たが、其の艦隊はギリシヤ人のために跡形もなく敗られて

しまつた。此の戦争は實にギリシヤ國に取つても、又西洋の文明に取つても、大事の戦争であつた。斯ういふやうにギリシヤ人は、色々の方面にその理想特色を段々發揮した、その年代は紀元前五百年から四百年の間のことである。

ロマ人の  
文明

政治と法  
律

次ぎはロマ人。ロマ人の特色は、ギリシヤ人のとは違つて居て、別な方面で發達した。ロマ人はギリシヤ人の如き美しい理想も、深遠なる思想も有つて居なかつたが、ギリシヤ人になかつた大切なるものを有つて居つた。それは即ち政治上の技能並に法律上の力である。ロマ人の起つた地は、今のロマの町にあるバラテノといふ丘で、其處に人口が僅數百人住んで居た。それが元になつて、其の近邊の種族と段々一緒になり、四方を或は征服し、或は同盟して、遂にイタリア半島全體を一の組織の下に纏めた。ロマ人のやり方



は、他の種族と一緒になつた場合には、其の種族の法律習慣は、其の儘にして置いて、根本だけは、ローマの支配を受けさせ、各地にはその元の習慣を許しながら、根本の統一を失はなかつた。そこで紀元前百年の頃には、其の領地は今の中地中海の沿岸全體を亘つて、地中海はローマ國の池であるといふ位になり、其の領地の中には色々な人民が居つた。健剛で勇敢なゲルマン人種も居り、或は宗教に長けた東方の人種も居り、或は學問に秀でたギリシヤ人もある。それを總て統一した方は、一方には兵力があるが、それと共に行政、法律の才能が大切な力であつた。ローマ人がこの複雑な大帝國を統一するには、軍隊を以てそれを守つたのみならず、彼等をして、自分等はローマ帝國の一部分であるといふことを非常に名譽と思はせるやうにした。それから又彼等の法律は唯偶然に出來たものでなく、天理人道に基いて居るといふ解釋で、それをうまく適用し、段々に依て教育するやうにした。其の關係は斯

うなつて居る、初めローマ人が彼方此方の人民を併せた時代には、各々其の國を支配する別々の法律があつたが、段々にそれ等の間の調和を謀つた。即ち種々の人民の間の交渉事件を裁判する爲に、その交渉調和の中から法律を定め、それを *Jus Gentium* 即ち諸の種族の法律とした。是が今日の國際法の本になつて居る。其の外、内治の行政や、民法や刑法の事も、皆時々必要と共に、法の根本といふ事を忘れなかつた。法律に對するこの解釋は主としてギリシヤのストアの哲學思想に基いて居る。

元來ストア哲學は、ギリシヤに起つたものであるが、それを立派に發達し法律や道德の實行に應用したのは、ローマ人である。ストア學派は、支那の儒教や、印度の數論に似て、哲學の學說としても、道德の説としても、亦其の實際の結果に於ても、能く此等に似て居る。學說の方は姑く別として、其の根本思想では、一切萬有を支配する眞理は一である、而して其の眞理は單に



自然に萬物全體に通じて行はれて居るばかりでなしに、殊に人間の理性に能く現はれ、それを人生の實行に用ゐれば、法となり道となる。ローマ人は此の考へを應用する工合に於て特に秀で、居た。之を儒教の言葉で言へば、天命之を性といひ、性に率ふ之を道といふことになる。之を佛教風に言へば、法といふことになる。この法を特別の場合に應用する、それが即ち法律となつて、政治と社會との元紐になつた。國には國の法律があり、村には村の法律があるが、それ以上に又人類共通の法がある。人種は違ひ、言葉は違つて居ても、人類としては吾々は兄弟、同胞である。此の同胞といふ意味は、後に云ふキリスト教などの解釋とは少し違つて居るが、兎に角人類といふ上からは四海兄弟で、固より貴賤貧富の區別はあるが、根本の法は總ての人に通じて又萬古に亘つて變らないものである。時と處に依て變るやうなものとは法でない、道でない。此の變らないものが一般に通じての道である。萬

四海同胞の思想

法と道の思想

自由思想と個人主義と法律の一致

古に通じ、一般に通じて變らない道を、人と人との關係、國と國との關係に現したものが、法律である。それからもう一つストア學派の特色として、今云つた考の結果、自然に出て來ることには、此の如く人間には、各々自分に理性を具へて居るから、一個人として侵すべからざるものである。人の人格、人の尊嚴は、侵すべからざるもの、外からそれを手段に使ふことは不當である。其の點から言へば、この法律思想は自由思想や個人主義に一致する。併しながら、此の自由なる個人の人權は絶對的でない、條件付である。條件付といふのは、其の人が眞理を代表する人間としての一個人であるといふ上に於て自由である。それ故に、吾々の生活は一個人として自由であるが、自由と尊嚴との依つて起る眞理には服従しなければならぬ。吾々の性の中に眞理が現はれて居る、之をストア派では名けて理性と言つて居る。人間は理性の道心を具へると共に、



肉體の方からは色々の慾が起つて來る、其の慾は即ち私慾である。之を儒教では人心維れ危く、道心維れ微なりと言つて、反對のものとして居る。吾々は、天の道を貴び、眞理を啓發する爲めには、どうしても一方の私慾を抑へて行かなければならぬ。そこでストア哲學では己の慾を抑へて行けば、其處に良心が現はれ、眞理即ち理性が現はれて來ると教へた。ギリシャのストア學派では、この議論は人性の研究であつたが、ローマ人は之を取り入れて、一方には之を法律の解釋に使ひ、又之を總て道徳と修養とに實行した。法律の上から言へば個人主義であるが、人間の本性を認め、又之を發揮するといふ方からいへば、本性主義又は遍通主義といふべく、又世界主義にもなる。ローマ人は法律の上で私法と公法とを能く調和した如く、國家主義を實際の道徳に應用してローマの武士道が出來て居る。

ローマの文明が段々出來上り、武士道が立派な結果を呈して來た時は、即ち

ローマ文明の華實共に具はつた時代で、その武士道を實行した人々の中には、身を國家に獻げて國に盡し、又それと共に自分の名譽を重じ、戦争をするにも、自分一個人を主にして居らず、自分を圍んで居る公有團體を主にして、國家の爲めに戦ふといふ考が非常に勝れて居つた。固より何所の國でも、善人もあれば悪人もあり、其の間に腐敗もあつたが、全體の統御はこの主義で行はれた。兎に角ローマ人が道徳と法制との上で善良な發達をしたのは、ストアの哲學に基いてゐる。

ローマ人の長所は政治にあつたが、單に政略の政治でなしに、その思想の根本に大きな統一主義があつた。その政體から見ても、始めは小王國の王政であつたが、同盟を結び、領地が擴がるに従つて、共和政治となり、國民特に貴族が集まつて國家のことを相談をして行つた。その中にも、根本に最高の任務に當たるべき人を立てなければならぬので、其の人を立てたが、其れが



後に皇帝となつた。是れが紀元前二十四年の頃であつたが、この命令官制度は終に純粹の王政となり、ローマは全く帝國となつて、ローマの文明は、其の支配の下で善美なる頂點に達した。帝國內の交通は能く整ひ、富も充實して、その文明はアウグストとユリオと兩カエザルの治世數十年の間に最も燦爛たる光を放つた。併しながら其中にローマ人に取つて一の困難があつて、是がその帝國の潰れる源であつたが、それは宗教に統一がなかつた事である。ローマには道德思想の上でも法律の上でも統一が出来て居たが、宗教上の統一は缺けて居た。ローマは各國を制御するに、各々其の人民をして元の宗教に依らしめ、之を根本的に改める力がなく、種々の宗教を許して居つた。されば帝國の中で各地の人民が隨意に宗教を信じて、それがローマの首府に集まり、百鬼夜行の有様を呈した。各國民の信じて居る宗教は、皆其の種族に限られた宗教であつて、ローマ人は法律と政治とでは諸國民を統治したが、宗教信仰の上

では各人種の自治に一任したのみならず、終には却て彼等の神々を容れて、雜多の崇拜に感溺し、人心の混亂をも來す様になつた。哲學に於てはストア哲學を有つて居たが、それと一般人民の宗教信仰とは一向關係しない。そこで人民は色々の方面に信仰を求めて、色々の迷信が行はれ、國家の精神と人民の信仰と二つに分かれる様になつた。外國の宗教、迷信がローマに這入つた中でも、特にエジプトの宗教の如きは魔術で餘程勝れて居り、其外占ひをするといふやうなともなか／＼盛であつた。ローマ人は占ひが好きであつた、此の事は日本の歴史にも似た處もある。信仰の無い人は卜占に走るといふのは真で、理想的の信仰を有つて居ない人は卜占を好む。即ち儒教も一方は大變立派なものであるが、易といふものがあつて占ひをする。ローマにももとから卜占が流行して居つた。そこへエジプトや小アジアから、魔術や何か、這入つて來て、大に行はれた。ローマの町には世界中の宗教が集つて、又各國の人



が皆自分勝手の宗教を奉じ、ローマ人も思ひ／＼にその神々を拜むといふことになつた。

そこで帝國統一後、その政治上の統一に相當した統一の宗教が必要になり、カエザルは餘程英主であつたから、國を政治上のみでなく、精神上にも統一するやうに何か與へなければならぬといふ考を有つた。そこで始めたのは、即ち皇帝を崇拜する事。此の萌芽は餘程前から既に出來て居たのであるが、カエザルに至つては、其の人を帝國統一の精神として神の如くに崇拜するやうになつた。天上に居る神々を拜むといふのでなく、現に生きて居る皇帝を神様として拜むで、之をローマ帝國の神とした。數多の國々の氏神は、其の地方の神であるが、皇帝は總ての人民に通じた神であるといふ宗教を始めた。紀元前九年、即ちキリストの生まれる前の四年に、皇帝の誕生日の記録が岩に彫付けてあるが、その趣意はかうである。世界中の人民を救ふ爲め

に、此の人が現はれて來た。吾々の先祖が長い間望んで待ち焦れて居つた如く、世界を統一し、世界の人を救ひ、その平和を現はす爲めに現はれた。このやうな事が彫付けてある碑文が出來て來た。此の宗教がローマ帝國の全體に行はれて、政治上の皇帝は、又同時に又祭祀神事を支配する法王といふ意味になつた。さういふ工合にして、宗教上の統一も、先づ表面上は出來たのである。併しながら皇帝の崇拜は、何等深遠な理想に基いたものでなく、唯現在帝國の支配者、帝國の代表者であるといふだけで、裏面には何等の根據が無く、それ以外に學問上色々の理窟が出來て來、又種々雜多の迷信が行はれ、魔術を行ふといふやうな事は盛であつたが、夫等は皇帝の崇拜とは何等の關係も無い。この皇帝崇拜がストア哲學と連絡してもう少し進み、もう少し長く續いたならば、其の根據は固くなつたかも知れぬが、ストア哲學を之に應用してそれを發展する人が無かつたのは、ローマの爲に惜むべきことであつた。



さういふ工合に、ローマは政治法律に於て前古不比の隆盛に達して、一つの世界的帝國となつたが、其の世界的帝國を統御する根本の理想に於ては大に缺乏を感じて居つた。此の缺乏が原因と爲つて、ローマ帝國は遂に滅びた。併しながらその法制的考だけは滅びなかつた。今日の日本の法典の如きも、羅馬法に則り、羅馬法が日本の法典の基を爲して居るが、それは、色々な種族を支配する爲めに、色々な法律が出来て、それが人道の根本に入つて遍通の法理を含んで居るがためである。自然の法理を見附け出して、其の理に基いて出来た法律は、自然何處の國にも應用し得るもので、今日の日本にも、その原理は適用出来る。實際統治上の經驗からして、自然に遍通の理を發見したのは、即ち羅馬法で、羅馬の文明は此の點で不滅である。今日日本では種々社會の習慣と合はないと言つて、今の法典を攻撃する人もあるが、是も已むを得ないものである。然し羅馬法を大部分採用したといふとは、決して悪い事

でない。此の如く羅馬の國は滅びても、法制は其の國と共に滅びない。此の法制は、ヨーロッパ諸國の法制的根本をなし、進んで其他の外國にも今尙及ぼしつゝある。

それからもう一つ西洋文明の基がある。是は即ち今云つた羅馬人が最も缺乏を感じて居た信仰の方面である。その根本は即ちユダヤ人の宗教。ユダヤ人は、實に不思議な人民であつて、洵に小さな國に居り、其の歴史を見てもあらゆる艱難を経て、而かも團結を失はず、又團結しただけでなく、何時でも廣大な理想を失はなかつた。それを悪く言へば、誇大妄想といふとが出来るかも知れぬが、兎に角彼等が其の信仰を棄てなかつたといふとは實に著しい事實で、如何なる困難に遭つても、それを棄てない、困難に遭へば遭ふ程その自信と、神に對する信仰が盛になつて來た。即ち彼等は、その始め



はエジプトに居て、奴隷の境遇で苦しめられて居たが、其の間にも自分の種族の唯一の神を信じて、失望しなかつた。その神は自分等を保護して呉れる神で、是より以外のものを拜んではいけない、此の唯一の神の外に神はないといふのが、その信仰であつた。其の神の名をヤフエと云ふが、之を日本ではエホバと云つて居る。彼等は如何なる不幸の中にも、このヤフエを見失はず、神の手引きに導かれて、エジプトを逃げ出し、終にバレステナと云ふ土地に落着いて、數百年の間居つた。其の時は、南にエジプトが盛になつて此方を脅かし、北の方にはアッシリアが四方を併合して居る。其兩方の挟み打ちになつて、政治上の獨立を保つ爲にどちらかに附かなければならぬといふ状態になつた。併しながら、ユダヤ人は、迷つた時もあらうが、何時でもヤフエに依頼した。それ等の事に恐れてはならぬ、強國も恐るゝには足らぬ、我々には神ヤフエの保護がある。但し此の神は正義の人民を護るから、我々

ヤフエの  
一神思想

豫言者

は神の法を守らなければならぬ。此の神に頼り、此の神の力に依つて、國を守れば宜い。言ひ換ふれば、神を信じて居れば、如何なる敵が來ても恐るゝに足らぬ。アッシリア人が百萬の兵を持つて來ても、又エジプトが如何に澤山の兵で攻めて來ても、ヤフエの神力に依つて、此の國は滅びないと云ふ信仰を常に鼓吹した。豫言者は始終此の如く説いてその人民を勵まし、又其の信心を刺激したので、ユダヤ人の信仰は、段々強く深くなり、純一の信仰を有つて、ヤフエに頼るやうになつて來た。イザイヤやエレミヤなど豫言者の信仰には、實に誠忠と熱烈との最も著しい例を見る事が出来る。且つ又彼等は、國民が擧て敵國アッシリアの捕虜になつて、流竄の境遇にあつても、その信仰と希望とを失はなかつた。ユダヤ人には哲學も文明もないが、執着心の強い信仰があつて、神を信じて何處までもやつて行くといふ信仰の強さに至ては無比であつた。是が迷信であるにしても、誇大妄想であるにしても、



其の力は吾々が之を認めなければならぬ。

ユダヤ人の國は一度取られて、元の國は失つたが、其の以後再び興つて、又再びローマ人に征服せられた。此の時代には今までのやうな豫言者は現れなかつたが、終始ローマ人に對して反抗しやうといふ精神、謀叛の氣象が熾になつて來た。此の考は普通に云ふ謀叛とは違つて、神は唯一つである、吾々は總て世界の同胞であるといふ信仰を有つて、その神の支配を實行しやうといふにあつた。此の希望と信仰とを精神的に轉換して、何れの人の至情にも透徹する信仰を現はしたのは、即ちキリストであつた。キリストは、斯う云ふ信仰を有つて居る人民の間に出て、而して彼等の政治上の意味を宗教の純信に轉じたのである。吾々が信する所の神は、此の世に唯一の神である以上は、世界中の總ての人民が之を信するやうにならなければならぬ。その神は天上の神のみでなく、人の心の中に在ります。吾々は此の信仰で神の國を來たらす準備をしなければならぬと云ふ教を説いた。夫がユダヤ人の政治上の希望と衝突して、キリストは彼等のために殺された。尙キリストの一生の事に就ては、色々の話もあるが、それは略して、兎に角キリストといふ一人物の出現は、世界の人心を一新し、歴史に新時代を開く基となつた。そこでこの教は十字架の上に死んだキリスト、靈に復活したキリストを中心として、其の弟子達、即ち使徒等の力で段々ローマ帝國の中に弘がつた。神は我等の父、人類は皆同胞、キリストといふ一人物は萬人の救世主、我々はその信仰で救はれる。此等がキリスト教の福音で、今までの何れの宗教にも思想にもなかつた新福音。而してキリストの信者は、この信仰に基いて新世界を作らうとした。ローマが渴望して居た人心の統一は、茲にその材料又基礎を得、而してキリスト教の理想である神の國、人類同胞の信仰團結は、ローマの帝國政治に代つて人心を統一する天職を行ふ事になり、ギリシヤの哲學と文明とは、キリ



スト教の思想を整へる材料になつた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

此の三分子が集つまつて出来たのが、ヨーロッパの文明である。即ちギリシヤの方面からは、總て人間の生活を形の上に於て美はしくするといふ理想と、ローマの方からは、天理人道に基いた法律に依て人民を支配すると云ふ理想を得て來た。天理人道に基いた正義の法律といふ理想と、ユダヤから出て來たキリスト教とは、相補つて、ローマの理想を深遠にすると共に、キリスト教の理想を實際の方面に開展する様になり、ローマの法律思想は宗教の信仰に合體し、ローマ帝國といふ形體をキリスト教の教會で繼承する事になつた。この二つの分子が集まつて中世紀の文明が出来た。中世紀の文明が一轉して今日のヨーロッパの文明が出来た。近世の文明には特にギリシヤの思想が強くなつて居る。要するに今日の文明は此の三つの理想が根本をなして、三ツ

から中々立派な遺産を承け繼いで居る。ヨーロッパの文明には、特に近年には色々の短所を表はし、弊害を長じて居るが、その根本には今云つた三分子の大切な長所をもつて居る。而して如何に弊害の雲霧の爲めに時々光明が蔽はれても、日光は不變不動で、雲が去れば、元の光は必ず現はれて來るといふことを考へなければならぬ。



## 二 中世の文明

中世紀の  
文明

前に述べた古代文明がロマ帝國に集まつて、その跡を繼いでキリスト教の文明を作り出したのが即ち中世紀である。古代の文明は色々の方面から色々に發達したが、それがロマ帝國で一緒に集まつて來た。即ちキリストの出した頃は、丁度此の帝國の最盛時で、政治上には當時に知れて居た總ての世界を統一し、經濟上にも前古に類なき發達をした黄金時代であつた。併し帝國の隆盛時代は、その衰へる始めであつた。餘りに多くを取り入れた爲めに、法制上の統一は着いて居つたが、其の實質たる精神上の統一がつかない。それで此の統一を遂ぐる爲めに、皇帝の崇拜を始め、地方にも行はれた。併しながら、是もアウグストの如き賢明なる君主が支配して、實質勢力を有つて居た間は行はれたが、それから後度々皇帝が代はり、暗君も多くなつて、是

も十分保たないやうになつて來る。茲に於て唯々政治法制の上で統一を得た世界は、尙精神上的の統一を餘程要求して居つた。今までの宗教では到底人心は満足しない、人は迷ふのみで、統一革新の時運が迫つて居た。其の時運に乘じ、其に新生命を與へたのは、即ちキリスト教である。

キリストが生誕してから後 六十年ばかりでキリスト教は 既にロマ帝國の上流に這入つて居る。又此の帝國の東半分は、到る處キリスト教の信徒を見るといふ有様で、門人等の熱心と時勢の要求とで、早く此の教が傳播した。是等の直弟子達の働き、或は傳道の事蹟は、著しく又多方面であるが、其の大體を云へば、ロマ帝國にキリスト教が這入つて各地に擴がつた場合に、キリスト教は一種特別の位置を有つて居た。其の信仰は、何でも彼でも拜む宗教でなく、而かも別に神様として祭つて居るものもないやに見え、祭もしないで、説教をして祈禱をするだけで、今までの宗教とは違つて不思議な

キリストの  
羅馬に  
與へた  
最初の  
人象

キリスト  
の流入



事をやる。一般人民から云へば、何だか知らないが、薄氣味の悪い宗教だといふ感がある。其の上キリストの教は、唯一の父を奉ずるといふ教であるから、其の傳道は、外の宗教と違つて、一般に行はれて居る神様に對して少しも敬禮をしない。冷淡であるのみならず、總て他の神々を排斥する、それが爲めに他と衝突する。且つ又この宗教に入つた者は、どうも頑固で、一旦入つた以上は叩いても擲つても改めない、何處までも自分の信仰を續けて行く。そこで一般の人から忌がられた。又帝國の政治方針として、宗教の上にあつても、現在の有様を維持する方が必要で、帝國の方針は變動をしない様にとちやんと附いて居る。此の點は、徳川政府と同じであつて、何事も現在の有様を維持すれば宜いので、宗教の事から社會萬般の事、總て之を更へてはならぬ、其の教の如何に係らず、弊害も伴つて居ても、其の教さへ守つて居ればよいと定まつて居る。その様な處へ持つて來て、不思議な變てこな風

人に改心を迫つたのはこのキリスト教であつた。それでこの教徒に對する迫害が初つた。此の迫害は、紀元六十三年頃に、ネロ帝が非常にキリスト教徒を慘殺するに始まつた。其の前にも一度あるが、ネロ帝が始めた時から以後三百十三年に信教自由の布告の出るまでに、十度の大迫害を行つて居る。その間には帝國全體到る處のキリスト教徒を檢擧し、財産を沒收し、着て居る着物も脱がせ、家は奪ひ、非常に迫害を加へたが、キリスト教徒は無くならない。當時の諺では、キリスト教徒が殺された血の雨が降る處には、新なるキリスト教の草が生へたと言ふ位に、迫害を受けたれども、それが爲めに却つて勢を増して來た。帝國の勢を以て迫害を加へたけれども、それが爲めに滅する事が出来ない。そこで遂に紀元三百年の始めに、基督教徒を非常なる手段で迫害したが、どうしても之を壓迫すとは出来ない。當時皇帝の輔佐になつて居つた副皇帝が四人あつたが、四人



ミラノの  
布告

の間にキリスト教に對する態度で異見が生じ、終にキリスト教を許すといふ方に傾いて、三百十三年ミラノの布告といつて、信教の自由を許す令を發した。この副帝の一人が即ちコンスタンチノ大帝になつた人で、此の人は三百二十四年に皇帝の位に即いて、終に斷乎としてキリスト教を羅馬帝國の國教と定めた。外の宗教も許しては居るが、決して之を奨励せず、公の宗教、帝國の國教はキリスト教であるといふ主義を定めた。

此の様にして、キリスト教は、約三百年で羅馬の國教となり、あらゆる障害迫害の中に世界を支配する大勢力の基礎を作つた。此の宗教の起りは、兵器も何にも無い貧民の組合、下等社會の宗教團體であつたのが、その勢力が終に、之を迫害した羅馬帝國を服従して、帝國の君主で神と稱せられる皇帝が、刑死の賤民キリストを崇拜するに至つた。此の間の變化は著しい變化であつて、此の間の教徒の信仰と熱心と忍耐とは、宗教史上の偉觀で、信仰の

帝國の國  
教

政教一致

力が如何に大いかを示して居る。兎に角、コンスタンチノ執つた政策は、キリスト教を國教として、教會と國家とを併立し、而かも國家の君主である皇帝が、帝國の君主として教會をも支配するといふ主義を定めた。即ち政教一致で、君主が國家と教會との首長である。斯う云ふ工合にして、キリスト教と羅馬帝國との關係は先づ落着した。

帝國の分  
裂

所がコンスタンチノの子孫の時代になつては、是だけ強い大きな帝國を一つに纏め、是だけ強くなつて來た教會を制御して行く力が十分でない。そこで國を二つに分けて、東西帝國とする事になつた。其の後は、一つになつたり、分れたりして居るが、西帝國は羅馬を都とし、東帝國の方は、コンスタンチノポリに都して、コンスタンチノの主義をどこまでも貫いて居た。今日ロシアの帝位は其の跡を受け繼いで、東帝國の帝位に即いて居ると稱する。西帝國の方では、帝室の權威が段々弱くなつて、帝位の方よりは教會の方が



力を占め、政治上の統一はなくなつて、教會だけの統治が行はれた。

其際に、西洋の文明に一つ新しい分子が加つて、新なる役者が現はれて來た。その人民を總稱してゲルマンと云ふが、今日のドイツ人やイギリス人、スカンヂナビヤ人など、ドナウ河の北側に多く住んで居た未開人民であつた。ローマ人はそれを歸服しやうとしたが、なか／＼征服されないで居て、羅馬帝國の衰へたに乗じて、此の人種が南の方に段々現はれ始めた。彼等は、北方氣候の悪い處で、物を作つても一向出來ないから、南の方にはどうも立派な處がある、到る處に花が咲いて居るといふことを聞き傳へる。今日でも、ドイツ人などは、イタリヤ國に對して一種特別な感想を有つて居て、ゲラの詩にも、ミルテの花が咲き、蜜柑や橙の果の實つて居る國といつて、一種の樂土の様に歌つてゐる。此の如き風土の差別は、我々の想像するより以上であつて、其の間を隔て、居る大山脈を突き抜いて、今は四里の隧道が出

ゲルマン

永遠の都  
ロマ府の  
陥落

來て居るが、其の隧道一つで、氣候風土がまるで違ひ、全然別天地に行つた感がある。それで此の如く南の方に行けば良い國があるので、ゲルマン等は段々其方に出掛けて來た。一人々々で出掛けるのでない。此頃のゲルマン人は多少社會的組織を作つて居つて、少しづつ團體を組んで、その大將酋長といふやうなものが政治を行ひ、全く軍隊的になつて居つた。さう云ふ群をなして居るものが、南の方へ押寄せて來た。衰へ始めた帝國は之を防ぐどころでなく、それ等を帝國の軍隊に入れて、之を使はうとし、彼等の勢力は段々増して來た。そこで終にその一團は、四百十年にロマ府を陥れて、永遠の都といつたロマは蠻民の奪掠に委せた。コンスタンチノ以後百年ばかりにして、今までは世界帝國の首府と思つて居た都が、北方の野蠻人の爲めに陥れられた。その際ローマ人の感動が非常に深奥であつた事はいふまでもない。此は丁度日本歴史で言ふと、桓武天皇の奠都以來四百年來の帝都が、一朝木曾の



冠者や東夷に荒らされて、政權は東の鎌倉に遷つたと同じやうなもので、その一層深く大なるものであつた。千數百年來、帝國になつてからは四百年以來、首府として有らゆる世界の文明を集め、世界に達する總ての命令は此處から出ると思つて居つた其の權力の中心が、北方蠻族の爲めに荒らされたのであるから、全國民に非常な感動を與へたに違ひない。今までとはまるで社會が變つて來たといふ感じを懷いたに違ない。

此の野蠻人はローマに侵入はして來たが、永住はしなかつた。然し此からして、ローマの衰勢は明白の事になり、鼎の輕重は問ふまでもない事になつて、北方の蠻人は帝國の各地に横行して、所謂國民移住の紛擾を來たし、その中には處々に國を建てるものも出來、西ローマ帝國は幾多の王國や小な諸侯の國に分かれる様になつた。この三四百年は即ちこの混亂の時代で、その間には西ローマの皇帝も時々即位し、又東帝國の名目だけの支配もあつたが、實

王國及び諸侯

政治の瓦解と宗教の統一

際は瓦解の時代であつた。

政治には瓦解はして居るが、その間に宗教上の統一は進みつゝあつた。侵入して來た野蠻人の多數はアリオ派といふ異端のキリスト教に屬して、隨分ローマやその他の教會を侵害はしたが、彼等はローマの文明に接して、その長處や華麗な點には感服して居、且つキリスト教の感化は彼等を漸次文明に導いて來た。それ故、政治上には蠻人横行の暗黒時代でも、思想文明の上の統一は尙保存が出來、教會の勢力は帝國の力に代はつて、西ヨーロッパの社會に統一を與へた。即ち新に此の統一の仕事を担当して起つたのは、キリスト教のローマ教會である。西帝國方面に於ては、ローマにあるキリスト教の教會が、元は澤山の教會の中の一であつたのが、段々勢力を占めて、帝國內各地の教會の中心となり、その連絡の任に當り、ローマの監督は追々西帝國全體の首領となつて來た。此の點は、日本の佛教とは正反對で、ローマ帝國の彼地此地に

ローマ教會



キリスト  
教會の協  
同一致

散つて居た澤山の教會は、互に連絡して居た。宗義上の争が出て來ても、各教會の監督が互に相談して議論を決し、何か事があれば、互に援け合ひ、キリスト教信者は、互に同胞と見、教會と教會との連絡の上にもそれを實行して居た。先にも述べた如く、迫害に對して抗抵力の強かつたのも、實は是が主なる原因である。一方の教會が迫害を加へられても、他の者が残つて居てそれを助けてやり、此方で迫害を受ければ、彼方が援ける。到る處さう云ふ工合にして、全體を滅す事が出來ず、迫害のために、互の同情が強くなり、援助と聯絡とが加はつた。而して此等の色々の運動に中心となつたのは、ロマの教會で、従つてその監督は總ての教會の首領になり、西帝國が衰へては、教會の統一が行はれ、ロマの監督は、終に法王として、西帝國の後を繼ぐ支配者となるに至つた。勿論その始めは宗教上の支配者であつたが、帝國の政治統一に代はつてヨーロッパを統一したのはこの宗教の力で、それからし

ロマ法王

て法王は、終に俗權の上でも、各國の君主や諸侯に命令を下す様にもなつた。それと相對して東帝國の教會は、政治上の權力の下で教會を作り、皇帝の支配の下に居たが、ロマの教會、即ち西教會の方では、教會の方が却て政治の上に立ち、社會萬般の事を支配するに至つた。即ち中世紀のヨーロッパは、ロマ教會のヨーロッパで、その文明は總てこの教會から流れ出た。

中世紀の  
區分

中世紀といふのは、ゲルマンの首領アラリクがロマを陥れた後を指し、又はそれから百年ばかり後にユステニアノ帝がロマの法典を編纂した時から以後、宗教改革に至るまで、丁度一千年間に亘つて、西教會がロマを中心にした活動にあつた。此の教會はもと宗教上の信仰で集つたものであつたが、ロマの教會は、キリストの委任を受けて、天國を世に現はす任務を行ふといふ主義で、宗教上の教化を四方に布くと共に、世間の威權をも握る様になつて

キリスト  
の委任



來た。宗教上の教化では、布教傳道で四方の人民を招致する、學問の權柄と教育とによつて人心を統一する、而してその上に、兵力こそなければ、世間的の實權をも支配して、茲に一つ強大な勢力となつた。即ちロマ教會の權威は帝國の後繼者であり、法王は皇帝の尊嚴にキリストの代官としての神權を備へて來た。教會と法王とを此の位置に上したのは、時代の趨勢と要求もあり、又キリスト教元來の力もあるが、又その間に出た人物の力にも依る。即ちロマ教會の監督が愈よ西帝國全體の法王となつたのは、法王レオ一世とグレゴリオ一世の力である。而してこの政治的方面の勢力の土臺を作つて、思想と信仰との上で西教會のキリスト教を作り上げたのは、レオ一世と殆ど同時に出た學者で、又熱烈の信者であつた聖アウグステノであつた。中世紀のキリスト教會、従つて中世紀文明の基礎を作り、西ヨーロッパに共通の文明を作り出したのは、この三人の力であつて、それに加へてロマの法制、經濟

教會が大  
勢力を得  
た原因

などの組織を加へて、今日文明の祖先となつて居る。

法制經濟の事は別として、思想信仰の上で天下を統一したロマ教會中心の文明は、獨り宗教上の信仰や教會組織の支配だけでなく、學問を興し、教育を普及して、社會を人心の根本から統一しやうとした。此の教育思想を政治的實力と一緒に行つたのは、即ちシャールマン（カルロ大帝）であつた。この人は今のフランスと西ドイツを中心としたフランク王國の君王として、尙東ドイツを統一し、八百年にロマ皇帝の位に即いた。此の人は政治上には西帝國全體を統一し、その兵力に次いで傳道に力を盡し、傳道に依つて教育を普及し、文明を開發し、而して八百年に教會から即位の式を受けたのである。皇帝なり國王の位が神の裁可で始めて成立し、教會の權威が之を公認するといふ事は、此を最初の標本として、以後段々に西洋全體の風習となつた。此の一事は中世紀の教會組織に至大の關係のある事で、コンスタンチノ

シャルマン  
大帝の統一



はロマの皇帝として教會をも支配するといふ主義で、キリスト教を帝國の國教としたのであるが、此の後には帝國と教會との併立といふ事になり、帝位は政治上の首位を占めて、教會は宗教上の首位として人心感化と道德や教育上の主權者となつた。即ちシャルレマン以後は、分業主義で、世間の方面には、ロマ帝國の皇帝が權柄を握り、宗教に關する事柄は法王が其の主權を握る事になつた。併ながら、帝位の根本は、矢張教會が神の御心に從つて與へるといふ主義にして居つた。此の主義は、是から以後、事實に於ては十分には行はれなかつたが、名目に於ては、又少くとも理想としてかくあるべきものといふ事になつた。この主義は今日まで尙殘つて、現在のドイツ皇帝は、シャルレマンの皇統を受けて居るといふ事になつて居る。その外には、後にナポレオンがフランス皇帝と稱したが、その外は皆王と稱して居る。

シャルレマンの統一後、ヨーロッパは、又再び分裂して割據の状態になり、

終に皇帝又は國王の勢力が衰へると共に、封建の世となつた。中世紀の文明は、一方に教會を代表する法王があつて、其の方面から教會の理想を行ひ、政治上に皇帝の下には澤山の大名があり、諸の種族が割據し、その間には又教會即ち僧侶の貴族が領地をもつて、非常に錯雜した社會になつた。そこで社會の上には國王の權力と大名貴族の勢力との衝突があり、教會の中では、ロマの法王廳と北方の地方僧官との關係が中々面倒であり、その中に國王と法王との間にも權限と實力とについての争ひがある。そのために實に紛糾した争ひを生じ、その勢力の消長にも色々の變遷はあつたが、要するにシャルレマンから後三百年の間は、その問題の解けない紛争の時代で、その間には政教併立の主義から、一時は政權兵力の時代となり、それから十二世紀以後二百年の間は、法王の勢力、教會の勢力が特に秀で、中世紀文明の中心を作つた時代、十四世紀以後は中世紀文明瓦解の徵候が段々に規はれた時







に十分その目的を達する事は出来なかつた。此の遠征には、教主の墳墓を異教徒の手から回復せよと説教して巡廻する僧がある。各地の王侯はその郎黨を率ゐて集まつて来る。各々自分の旗印を立て、鎧や楯から馬具まで各美を盡して、武装の陳列の様に、集まつて来る有様は、實に燦爛たるもので、そこで各地から集まつて来た大名は、皆自分の郎黨家子を率ゐて色々の組合を作つた。此の組合を *Order* と稱して、各々の *Order* には皆旗印や紋章があつた。是が即ち今日の勳章の元で、勳章を *オーダー* といふのはこのためである。此の如く、大名が集まつて、大舉征伐に出掛け、前後七回も戦つた、其の間には色々の勇者談もあれば、又悲惨な事もある。十字軍に従事した王侯の中で最も有名な人は、フランス國王ルイ九世である。此の人は聖人の號を受けた位で、フランスのためにも、亦キリスト教徒としても實に比類ない人である。兎に角、十字軍の間には、信者で又勇者たる者たる人々の佳話を澤山

残し、宗教信仰の方面でも、又所謂る武士道の方でも、中世紀の花といつてよろしい。勿論又その裏面には悲劇もあれば、又憤慨すべき事もあつたに違ひないが、ヨーロッパ全體が、その地方割據の紛争以上に、一致の行動を取り、此の長期の戦争に勇氣を示した事は、教會の力と武士の意氣地とを示したものである。その戦争の終結は、休戦で、キリスト教徒が手を引く事になり、エルサレムの地はトルコ人の手に委し、只聖墳參詣の事を定めて引き下つた。二百年の勇氣も終には夢の如く散じたが、然しそれが中世紀の花を咲かせた外に、尙色々の方面に結果を生ずる様になつた。

此の戦争は、此の如き終を告げたが、一方に於ては近世文明の基になつた點が二つある。其の一つは、十字軍に出掛けて行つた爲めに、今まで知れて居なかつた東方の文明が知れ亘つて、今までロマの教會で教へる學問より外に、何も善いものはないとして居た迷夢が、覺め始めて、西ヨーロッパ人



の眼界を他方面に開く源になつた。今日使つて居る所謂アラビア數字や、或は化學や、代數學の如きも、アラビア人から得たものであり、又その外澤山東方の事物が西洋に這入つて來た。釋尊が一人の聖人としてロマ教會で尊崇せられて居るのも、アラビアを経てあり、又今日のエソップ物語の如きも、印度のを西に傳へた材料である。云はゞ西ヨーロッパ人の眼界は、この遠征の結果大に開けて來て、ヨーロッパ以外にも文明がある事を知り始め、後に大に東洋の文明に接觸する基を開いた。是が近世文明の一の基になつて居る。

もう一つ、十字軍は精神上的の團結があつた爲めに此だけの仕事こそやつたが、政治上の組織が極めて缺けて居つたといふことを悟らせた。一致團結して、熱心を以て各地から集まつて來たが、勢力としては烏合の衆であるから、その戦争の結果が斯う云ふことになるのも尤もである。封建的割據の弊

を此時から深く覺り始めた。中世紀の文明は、主義としては帝國統一を唱へて居つても、それが事實になつて居ない、信仰精神はあつても、政治上の組織に缺けて居る處があつては仕方がない。中世紀の理想として、法王は精神上的の君主、皇帝は政治上の君主であるから、政治上の皇帝が總て政治の方に絶對權をもつて、法王は單に精神上的の統一に力を致さなければならぬ。即ち政教併立の主義も此の間から出て來、ダンテは「君王論」といふので、その主義を主張し、ドイツ帝フレデリコ二世が帝國統一の事實を現する世界の救主であり、政治上の新紀元が茲に現はれたと、理想的に之を仰いだ。それも事實にはならなかつた。教會の勢力が最も強い時に、ダンテの如き信仰家から、此の理想の提説が出ただけでも注意すべき事である。封建割據の勢はその後も尙續いたが、十字軍の末から宗教改革に至る二百年の間は、各國に政治上統一の機運が段々に進んで、終に近世的國家の基を開く準備の時代







保守的氣  
風

べきものとして、神の御心を受け、人間を支配すべきもの、其の理はチャンと事前に備つて居る。さういふ風に總ての現象を斯ういふ議論に依つて解釋する。此の哲學はローマ教會の中堅になつて當時の哲學思想を支配した。而してこの事前の理を、總ての事柄に應用し、何事をもそれから演繹し、何物をもそれに依つて判定するのが、その學風である。神から與へられた事前の理で既にチャンと出來上つて居るものを研究するが學問である。そこで世の中に新しい発見といふものは無い譯にもなる。即ち實際或る意味からは新しい発見といふものがあつても、その元は既成の理に實在して居るといふ。この主義は理の上では立派なものであるが、それを極端にすると、新に研究する必要は無い様になり、今までのものを鍛へさへすれば宜いといふ事になる。即ち教會の權勢を握つて、自ら指導者を以て任ずる者に、此の氣風が生じて來るのは、獨りキリスト教ばかりでない。スコラ哲學の考察は、事前

トマス、  
アキナス教會の修  
道組織

の理に基いて觀察するので保守的の氣風に陥つて居る。そこで此の主義に反對する所の名目論が段々出て來た。教會の哲學としてはスコラ哲學といふチャンと出來上つたものが出來て、それが一代の思想を支配し、總ての思想の中心になつて居り、その大成者であるトマス・アキナスと云ふ人が萬事の標準となり、その著書神學大成は恰も天台の三大部の如きものであつた。

學問の方はそれだけにして、もう一つ實行的の方面で、教會の精神的一致が團結といふ事實に現はれたのは即ち修道組織である。十字軍では各地の大名或は武士がオーダーを組んだ如く、それと同じく、オーダー即ち教團と云つて、修道僧が一定の規律の下に修行して、各々その教團の主義方針で働く。或は單に戒行道德の修業を目的とするものもあれば、又教學を事業とし、又は慈善を目的とするものもある。而して此等の教團は、各々一つの團體と



して、一定の首領に屬し、又各々特色のある教規と組織とはあるが、皆同一の公教會の範圍で働くもの、即ち教會の統一精神を奉ずるものであるから、その團體を組織する場合には、法王の許を受けなければ出来ない。

此の種の團結の中で著しいものは、學問を目的にし、従つて説教傳道をすることに日を送るドミニコ教團が第一に著しい。前に云つた哲學者トマスもこの團體から出た人で、此の團體の人には學者が多く、異端征伐をし、説教や布教の方面で盛に活動した。此の團體の名は、元はその祖ドミニコ Dominicus から出て居るが、それをラテン語で Dominici canes と解釋して、主の犬といふ意味とするに至つた。即ちキリスト教の信者は神の小羊で、それを異教者の狼が侵しに来るから、その羊を守る犬の役目をするといふにある。それ故、此の派には學者も居り、又説教者も出て、異端征伐で有名になり、今日も續いて居る。此の教團の氣象は日蓮宗の古に似たものがある。

ドミニコ  
教團フランシ  
ス教團

それからフランシス教團と云ふのは、フランシスと云ふ人が組織した團體で、此の人の人物は、日本の法然上人に餘程能く似て、西洋法然と云つて宜からうかと思ふ。若い時から出家をして、自分自身も、自分の弟子達も、信心で自らの心を修めるといふことを根本の目的にし、それから及んで慈善の事業を行ふた。此等の修道僧は隨分苦行をする、慾少く、自分自身の安樂を求めず、清貧と貞潔と従順とをその三大徳目として修行をし、又隨分俗人をも教化した。その精神を他に及ぼしてあらゆる慈善を行ふ。其の事業の中で一番重なる事は、癩病患者を收容したにある。此の頃にはヨーロッパに癩病が非常に多く、此の病は所謂天刑病で神罰だと思ひ、それに罹つたものは、全く交際を絶たれ、流浪してあるく外なく、そのために大に傳染流行をしたらしい。そこでフランシスは其の慈善心から單身その救助に従事して、段々その事業を擴張して、到る處に癩病收容所を建て、又藥草を配布し、終



にこの病根が殆どヨーロッパにはなくなる程になつた。此の事業は、フランスの感化を他に及ぼしたのみならず、又その門人等の宗教上の信念を増させることの助けになつて、その一門はその他慈善事業で益々世界にキリストの福音を傳へる様になつた。現に日本にも、今その尼僧の慈善學校や癩病收容所がある。フランスは、段々門弟を得て、終に一定の教規の下に團結を作り、法王の許しを得、ドミニコ教團と相並ぶ大勢力となつた。此の人は四十餘歳の短命で死んだが、その時には、名聲はヨーロッパ中に高く、殆どキリストの再來の如く仰がれて居た。

ドミニコ教團とフランス教團とは、その事業や特質では大に違つて、随分反對の點もあるに係らず、一教會の兩翼になつて働き、傳説に據ればドミニコとフランスと二人は、ロマの本山、ラテラノの石段で逢つた時、互に抱き合つて涙を垂れて喜んだと云ふ話も傳はつて居る。即ちドミニコの徒は激

教團相互  
の關係

烈に折伏の方面で進み、フランスは溫和な攝受の方面で働いて、兩方が能く助け合つた。この二教團が此の如く同じ教會の範圍内で相助けたのは、即ちロマ教會の統一的精神の現はれであつて、日本で云へば宗派となつて分かれる處にも相分れず、互に目的も違ひ亦規律も違つて居り、服裝なども違つて居ても、共に一教會の忠實なる別働隊になつた。此等教團の修道僧には各々制服があつて、フランススカンの者は昔の懺悔行者の風で、茶色の着物に繩を帯とし、フランス自らは跣足で歩いて居つたが、その門人等は鞋の様なものを書いて、靴足袋などは用ゐない。ドミニカンの人達は、眞白い着物の上に赤で十の字が書いてあるのを着、其上に黒い外套を着て居る。此は戰士の服裝である。その外色々の教團もあるが、兎に角教團活動の勃興は十三世紀から十四世紀に最も盛で、それが中世紀文明の上に大きな活動なし、今日に至るまでロマ教會の強みになつて居る。



中世紀の美術

建築

中世紀の美術は矢張古代の美術から出ては居るが、その間に中世の特色となるものが大に出て居、此もやはり教會を中心とし、教會のために出來た美術であつて、その統一的精神と信仰の深遠な趣を代表して居る。その中でも著しいのは建築であるが、建築の事は十分には口では話せない。或は寫真で見ても、大きさの感は得られないから、その下に立つて仰ぎ見る崇高の感は、口で言ふたゞけでは十分でない。それ故大體だけ云へば、中世紀の中頃までの建築はロマ風と云ふ様式であるが、此の様式は、先づ太い柱が並んで居て、それに半圓のアーチを作つて居る。大きな寺の内部に斯う云ふのがズット並んで居る、是は餘程面白い感じを與へ、その特色は落付きの一語で表すべきもの、沈重寂靜の趣がある。然るに十二世紀頃から、それに對して所謂ゴテク式が起つて來て、雄大宏壯に加へて非常に複雑な中に統一的の思想を表はす様になつて來た。中世紀の教會は、その統一的の考を單に信仰と

ロマ風

ゴテク式

して止めて置くのみでなく、之を十字軍として實行し、又修道僧の團體事業に實行して居る。その精神が寺院の建築に表はれて來たのがゴテク式である。即ち大體をいへば、ロマ風の圓いアーチが段々頂上で尖つて來て、それから尖塔になり、冠塔や高塔が天に冲する勢を示し、非常に複雑な構造や裝飾が皆相集まつて、高塔が天に冲し、天上の神を讚美する姿を示す。その内部には又同じ様に、高い柱から天井の穹窿について、此も高く天上に上る様であり、その下に立てば、宏大な天界の下に小な人間として居る心地がある。此等は皆中世紀の信仰とその教會統一の氣象とを示したものである。

音楽

美術の方で中世紀の氣風が表はれて居るものは、尙一つ、音楽である。それまでの音楽は極く簡單なものであつたが、法主グレゴリオに至つて音譜が出來上り、それから段々複雑な發達を遂げ、此もやはり複雑な統一と深大な信仰とを代表して、ゴテク風の殿堂と相助け相并んで居る。つまり宏大な思想



信仰には單純な音樂では適せず、壯大な殿堂に相當する音樂には、樂器でも又聲の配合でも、その和音、旋律に深遠と宏大との趣が生じて來、それで教會の信仰を代表すると共に、又大きな殿堂に適するやうな風になつて來た。此の様に於て、中世紀の教會の統一的精神が音樂の上にも及んで、ヨーロッパの音樂は、所謂る複音音樂の最も複雑なものになり、終に歌曲以外に獨立した純音樂となつたのである。

中世紀千年間の歴史には、ローマ教會が主人公であつて、社會の上では色々な點で分裂して居たが、それを宗教上信仰上に於て人心を統一した。人心を統一するに就ては、或は哲學に、或は又自然界の學問や教育に、其の他建築音樂など、有らゆる方面に發達した。固より中世紀の教會には、是に伴つて色々な弊害がある。大名がその領地を質に入れる、僧官を賣買する、ローマ貴族の

黨派が法王の位を動かす、法王廳の貪慾も著しいものがあつた。併しながら此の時代を支配した理想は、複雑で而かも統一的であつて、此の千年の間は、政治上の組織は缺けて居たに拘はらず、特色ある文明、宏大な統一ある時代を作り出したのである。所が一方には、此の統一に對しての不滿は往々生じて來て、それから封建的になり、大名が各地に分れて割據し、それが近世の國民分立の基になつた。それから又、中世紀の經濟上の發達も著しいものがあつて、此も教會の方から出て一般社會に及び、各大名に富が加つて來て、獨立心が出来、其處に至つて法王の勢力が弱くなり、そこへヨーロッパ以外の分子が加つて謀叛的の感情が起つて來た。思想の上でも今までの風に満足しないで、新しい方面を求めて、色々な議論が出、是が近世の始めになつて、遂に宗教改革といふことになつたのである。



### 三 近世の文明

精神と實  
力

中世紀の文明は、一方社會組織の方では、割據の有様になつて居たが、教會がそれを精神上に統一して、ヨーロッパ全體の文明の中心としてその支配者になつて居た。そこでこの割據主義と統一主義と二つの間の關係が、遂には面倒の種にならなければならぬ原因を含むで居た。一方には帝國といふものはあるが、是は名のみのもので、事實に於ては封建割據の世の中であり、一方に於て精神を支配する教會の力は、兵馬の力、實權以上の力を有つて居た。此の精神上的の統一が、何時までも物質上の兵馬の權を抑へる力があるや否や、若くは又封建割據の方面の力が大きく強くなつて、單に理想的の中心統一を遂に轉覆するに至りはしないか。是が中世紀の中に於ける大問題であつた。

近世文明

此の問題を解釋した結果が近世文明となつて現はれたのである。その解釋は餘り良い方ではないが、兎に角一つの解釋をして居る。其の結果を一言で云へば、實力の方が精神上的の統一に勝つた、即ち政治又物質の權力が信仰の權威に勝つたのである。近世の時代には、教會はまだ存在して居るが、それは殆んど名のみになつて居て、實際は兵と富との力が勝つて居る。是が近世文明である。ロマ帝國が一度兵馬の實力に依て世界を統一した、其の統一に代つた精神上的の統一が、茲に破れて、後に残つたものは、一個人の實力と、もう一つは封建時代に發達して來た所の國家と、此の二つである。宗教上の力はまだ残つて居るが、實力の方に壓倒せられる、何事も實力、物質の力が世間を支配する。そこで此の風潮が尙進んで、今日での文明の問題は、國家と個人とは、孰つが勝つかといふ問題になつて來て居る。即ち教化と信仰との中心を顛覆して起つた國家其物も亦怪しくなつて來た。

個人の實  
力と國家  
の實力



現在ヨーロッパの國家には色々の起源があるが、孰れも封建時代の割據の有様が大きくなつて、その君主が王室の元になり、それに依つて一國が統御されて居るのである。是も元は教會がそれに力を與へ、シャルレマンの時の考へでは、君主の權威は神から與へられ、事前の理に基いて居るといふ理論に依つて、人心を支配して來たが、今度は又總てが實力の支配に依て出来ることになつて來た。場合に依つては、國家や君主も或は要らないものになりはしないかといふ問題が起つた。フランス革命は斯の如き意味で、君王や國家は不必要なものとして、之を打破して了つた。そこで個人の力として先づ表面に現れて來たのは富の力である。即ち金を有つて居るものは、國家に對しても一種の力を有ち、その上財産の團結といふ力が現れて來た。財産團結の力と一個人の力と、何方が強いか、此が最近の問題となつて來た。戦争のある時は、軍隊の力が必要であつたが、今度は資本家と個人を代表する労働者

と、此の二の關係になつて來たのである。

全體の傾向を見れば、ローマ帝國の統一が瓦解し、それに代つた精神上的の統一も殆ど瓦解して、後には所謂生存競争の自由競争の世の中になつた。國家主義はあるが、其の主義は多くは生存競争を如何にして國家が保護するかといふことが問題になつて居る。それ故に、十九世紀の初めには、自由貿易主義が行はれて、その主義を取つたイギリスが一番勢力を有つて居たが、保護政策を取る方が、國家の力に據つて、其の國の資本主と労働者を保護して、他國と競争するといふ現在の國家になつて來て、ドイツなどは、その方針で盛にイギリスと競争する。此の場合に於ては、金で國民を使つて行く、それ以上の理想はない。斯ういふ妙な工合になつて來て、中世紀から進んで來た、近世文明が、此處で益々難關に陥つて來た。現在の此の問題は、何れの方面に向つてか爆裂せんとするの勢を示して居る。彼のヨーロッパの文明は太平



のやうであるが、決して太平の世の中ではない、一の大切な危機に臨んで居るのである。

\* \* \* \* \*

そこでこの成り行きは何うしてさうなつたのであるか。中世紀の文明は總て精神を元にし、理想を元にして、事實よりは事前の理に基いて居る。是が中世紀の特色である。それ故に精神上の力を以て信仰を支配し、教會が總て他のものゝ上に立つことが出来た。所が事前の理のみでは満足出来ない。世の中には新しい事柄が段々起つて来る。今までの理屈では解釋の出来ない新現象が起つて来る。それを今までに出来上つた理屈で解釋しやうと思つても出来ないやうなことが段々出て来る。之を解釋する爲めには、新しい色々の方面から見なければならぬ。事前の理が存するとしても、それは事實現象があつて始めて分かる、理は、事實があつて後に出て来るものである。言葉

思想の方面の變遷

名目論

東羅馬帝國の滅亡と西歐諸國への影響

を換へて言へば、今までの哲學或は信仰では、理は先天的のものと思つて居た、道は人間が知る前に既に存在して居ると思つた。所が段々それに對して疑を生じて、理は後天的事實があつて後に生ずる、道は人間が作つた後天的のものである、斯ういふことになつて來た。即ち哲學の中で、名目論で斯ういふ論が起つて來た。

この名目論が中世紀の思想を破壊し始めると共に、他方に又人心を他の方面に轉じて、新を求めさせるものが出て來た。即ち千四百五十三年にトルコ人が東帝國の首府コンスタンチノポリを陥れ、千年の間續いた東羅馬帝國は全く滅びて了つた。其の都に澤山の學者、技術家が居たが、彼等は新に來たトルコ人の支配の下に居ることが出来ないで、擧つて羅馬府に逃げ出した。そこで一時に學者や技術家が西の方に集つて來たので學問や思想の上に大變化を生じた。即ち今まで中世紀の人々は、學問と言へばラテン語でやり、教



會のスコラ哲學と、それから出た學問や教育が唯一の學問となつて居て、その學問の先祖であるギリシヤの文明は殆ど忘れて居た。そこへどしどしと古學が這入つて來て、美術と學問とで人目を惹くに至つた。そこで西ヨーロッパの學者思想家は、殆ど皆新に這入つて來た古の文明を研究し始めた。研究して見ると、其の中には色々美しいものがある。即ちギリシヤの文明は、個人精神の自由發達を貴び、自由活動を貴ぶ風であつて、今までの教會の如くに、總ての人間は皆一の教會の團結に服従して有難がつて居れば宜いといふのに反對の學風である。即ち智情意の上に於て、行ひの上に於て 各々自由の發達をすべきものであるといふ思想が、此の新興又は復興の學問と共に傳はつて來た。此の潮流と、中世紀に段々養ひ來つた美術文藝等が中世紀に準備をして居たのと（その準備の工合は略して置く）、二つが一緒に合して、そこで新に文學美術等の思想が起つて來た。それを文藝の復興 Renaissance と

ルネッサ  
ンスの時

いふ。文藝復興とはいつても、思想を昔に返すといふだけでなく、一方には新なる方面に向ひつゝ、今までは教會の教權に服従して居た精神が 俄に飛び出したので、過去の復興と共に、又新たな方面を求めた。此の潮流は滔々として思想界に流れ、文藝復興期の思想は、生き／＼した活潑な精神で、至る所、何物でも收めて自分の材料にしようといふ傾向があつた。是はこの時代とその前の時代との書を較べて見れば分かる。中世紀の書には、人物の目付きでも、皆温しい中に心を潜めて居る有様が現れて居るが、復興期のものになつては、目付きがバツト輝いたやうになつて居る。身體に就て言つても、中世紀のものは皆同じやうな身體の舉動をして落ち付いて居る。然るに新時代の人物畫では、人物が活躍して、手を曲げて居るものもあれば、身體を曲げて居るものもあり、反り身のものもあり、各々隨意の姿勢を取つて、生き生きとして居る。此と同じ精神で新なるものを求め初めた古學復興は、何事で



レオナルド

も新たなものを求めて居る。此の氣象の代表者でレオナルドといふ人があるが、此のレオナルドの如きは、繪も畫けば、詩文も作り、論文を書き、又哲學者であり、又同時に水力學の達人であつて、水を使つて機械を造つて見たり、或は空中飛行機までも造らうとした。さういふ工合に此の時代には、總て新なるものを求め初めた。

此の精神が段々進むに従ひ、此の運動が人道派といふ方に進んで來た。人道主義と言ふ意味は、中世紀の思想は教會の教權に基いて、教會が神から與へられた教權に服従するのである。然るに新時代の精神は、斯の如き事前の理を標準とせず、一定の宗義に拘泥せず、各々自分自らが求めるべき事實に基いて、當つて碎ける主義、即ち人間の活動を本位とする主義である。教會は神智本位の思想を本としたのを、今度は人間本位、人間中心になつて來た。所が之に反對で出て來たのが自然主義である。是は今日もある名である

人道主義  
の出現自然主義  
の勃興

が、その意味は大に違つて居る。一方には人間の活動を盛にしなければならぬといふことや、或は文藝復興時代には、文人美術家の外に、政治家も出て居るし、色々の方面で自由の活動をやると同時に、又天然の方にも精神を向けて居る。吾々は單に人間世界を研究して居るばかりでなく、天然自然の世界、即ち動物にしても植物にしても、天然には實に豊富な材料があるから、之を研究しなければならぬ。此の精神に基いて、人間よりも寧ろ天然を研究して天然を利用するといふ方の主義が出て來た。是は自然主義といふよりは天然主義と言つた方が宜い。

理性主義

斯ういふ潮流が段々彼方此方に現はれ、十八世紀には、理性主義が現れて來て居る。理性主義といふのは、吾々の信仰思想は總て外から與へられたものでない。吾々の自然の理性を本にしなければならぬ。神様から與へられた教へが標準でなく、人間の理性が總てのものを判断する本であるとする。こ



の主義と天然主義とが結び附けば、今日の科學主義になる。今日の科學、物理學とか博物學とかいふものは、此方から出て來た。之を方法から言へば、單純な理性主義の方は、演繹法を用ゐる、科學の方は始終何事にも歸納法を用ゐる。斯ういふ工合に違つて居るが、教會で今まで定めたことを教へること以外に、各々自由に活動して、自由に探究をしやうといふ方面に於ては、皆一致して居る。

此の如く文藝復興の文明が十六世紀に其の頂點に達し、それから人道主義と天然主義との十七世紀を経て、十八世紀の理性主義時代となり、それから十九世紀の科學全盛となつて、人間の精神には、餘程違つた方面が開けて來た。この自由活動の方面では、是等の運動主義の効能を見なければならぬ。併しながら、此の運動の根本が、事前の理に反對して、理は唯自己の理性の所産であるといふ主義に出て居ることを忘れてはならぬ。是が今日の科學教

育の弊をなして居る本で、是は遠く中世紀から萌芽を發して來て居る。即ち人間の智で唯探究して見付けたものを取つて行けば宜い、それから行きつく先きは何であるか、さういふことは研究する必要はない。道であるとか、事前の理を研究する必要はないことになる。中世紀のキリスト教の如くに神を萬事の説明にする事は必要はない、現代を研究して行けば宜い。何か初めから斯ういふ工合に基礎があるとか、斯ういふ目的があるとかいふことを定めるのが、抑も間違、迷ひである。それよりは現在現はれて來るものを、一々搜して行けば、何か信仰が出て來る、終に眞理が出て來なければならぬ。眞理が出て來なければそれで満足すれば宜い。かういふ結末になるから、近世文明の自由主義、天然主義は、之を推詰めて言へば、即ち現在主義である。基く所の根據も、越く所の目的も、伺ふ必要はない、唯現在あるのみといふことにも終り得る。それが今日の思想界に弊害を現はして居る。今日の教育



者は科學の教育を萬能の如く考へて居るが、科學主義は元斯の如き源から出で、現在斯の如き弊に陥入つて居るといふことを認めなければならぬ。中世紀の終をなし、近世の初めに至る道行の一として、第一は文藝復興であつて、その結果はざつと斯うである。

\* \* \* \* \*

新大陸の發見

それから次には、中世紀と近世紀の移り變りに一の大切なことが出て居る。それは新大陸の發見である。ポルトガルの船が先づアフリカを回航する、それからコロンボがアメリカ大陸を發見した。今までの人は、地中海を以て殆ど全世界と思ひ、印度まで位は知つて居たが、その外の新大陸などは夢想もしない。コロンボが出掛けて行つたのも、實は新しい大陸といふ目的でなく、唯西に向つて行けば、印度へ行くと思つて居た。然るに、一度新大陸を發見してからは、發見熱或は新しい土地を占領するといふ氣風が盛

になつて、イスパニア、ポルトガル、次いでオランダ、イギリス、フランス等の國々が、皆彼方此方に船を出して、恰も猫が鼠を狙ふが如く、陸地を發見して、植民地にすることが盛になつて來た。此の新發見は十字軍と一緒に、世界に關する歐羅巴人の知識を増し、彼等の眼界を擴げた。十字軍では、アラビアから、又間接には印度の文明を得た如く、今度の新大陸發見では、其處には文明はないが、新しい事物があり、此頃の人はアメリカへ行けば、黄金が木に生つて居り、幾らでも拾ふことが出来るといふ様に思ひ、盛に出掛けて行つた。今日は日本からも、黄金でも拾へるかの如く思つて、アメリカへ出掛ける者があるが、當時の人は非常な熱を以て出掛けて行つた。

是は一方には、新知識を開發したと共に、他方には、ヨーロッパ人の現實的の慾望を盛にしたことは、なかく激しいもので、我利々々亡者ばかり出掛けて行つて、命掛けて、向ふに行けば必ず金儲をして富を得て歸つて來る



といふことを目的にして居る。斯ういふ風に知識を増すと同時に、一方には一個人の慾を増して來たのみでなく、國家としての慾も非常に増して來た。今までの自分の國を守つて居るといふことだけでは足らなくなるから、互に國を侵略することも極めて盛になつた。中世紀にも國々が併合されたことは澤山あるが、小さい大名でも、それを亡して自分の領地にしやうといふのは、餘程の兵力を要する。然るに新大陸の發見をすれば、さういふことは要らないから、丁度相場師が相場をする如く、盛に植民政略、領地占領が行はれた。北アメリカはイギリス人とフランス人とが占領して了つた。印度の錫崙島一つでも、初はポルトガル人、それからオランダ人、イギリス人といふ順序を経て今日に至つて居る。或はジャワ島の如きも、元はポルトガルのものであつたが、遂にオランダのものになつた。ポルトガル人が日本へ來て、宣教師がやつて來たのも此の餘波であつて、日本も意氣地がなければ、九州

一つ位はやられたのである。斯ういふ風で世界の諸方に新占領地を見付けて植民しやうといふ氣風が盛になり、國際の競争が激しくなつて來た。國として自國だけでは進歩の餘地がなくなつたから、他國に行つて働くといふ競争が非常に起つたので、今日の國際競争も、畢竟此の時代からつゞきの芝居を演じて居るのである。

尙ほ又、新大陸の發見は、世界の交通を容易にし、新知識を増して、人間を自由開放的にした。自由の氣風は植民政策から出て來た點が多い。アメリカに植民したイギリス人は、多くは本國で自由を求めて得ず、新大陸で自由の國を造らうとの意氣込で出かけたものが多く、その後の獨立戦争も、實は此の氣風の發表開展で、その獨立の宣言には、ルソウの民約論に基いて、人間天賦の權利といふ事が盛に主張してあり、此の自由主義は又元に歸つてフランス革命の刺激にもなり、個人解放の氣風に端緒を開き、その波瀾はそれ



より以後益す大きくなつた。此の個人主義と新植民の物質欲とは、相互に刺  
 激になつて、此と國際競争の利益主義とは、共に近世文明の一特徴になり、  
 國家の膨脹利益の伸張と、個人の利益や商工業の利益と、相互にその私をな  
 す様になつた。國家元來の天職とか主義や抱負に基くのでなしに、個人直接  
 の利益を保護する爲めに、國家的競争が生じて來たのである。此の點に於て  
 現在の世界に、自由開放の結果が益々現はれて來てをる。

宗教革新

それから第三は即ち宗教革命である。宗教革命と言へば、單に宗教上の變  
 化の如くに思へるが、それは間違である。勿論此の事柄は元宗教の關係から  
 起り、其の結果に於ては中世紀の教會を打破する上に於て力があつた。然し  
 元の起りを尋ねて見ると、此は主として、北の方に居るドイツの大名等が、  
 南のロマ法王廳の權勢に反抗した政治上の運動であつた。一方には精神上ヨ

滅罪の切符

ロッパを統一して居る教會と、封建割據の國々との睨み合が到頭此處で破  
 裂したのである。南方ヨーロッパでは、フランスだのイタリアの人民は、此  
 頃は宗教には大分冷淡になつて來て居るが、ロマ以來の習慣があるから、教  
 會に服従して居る。北の方では、ドイツの帝位はロマ皇帝の位であるといふ  
 名はあつても、その實は蠻民以來の獨立心がある。その頃のドイツは各地大  
 小名の領地に分れて居た。今日でもドイツには二十六の國があるが、昔は非  
 常に多く、それ等が各々力を増して來て、法王廳に干渉されることを好まな  
 いやうになつて來た。丁度此頃に法王廳の費用も段々に嵩むで來、又その上  
 に寺院、特にロマ本山建立のために金を集める手段として、滅罪の切符とい  
 ふものを賣り出した。この切符を買へば、それに御祈禱がしてあるから、幸  
 福が得られるといふ。日本の社寺で、お札を賣つて歩くと同じで、盛に賣つ  
 て歩いた。ドイツの百姓は昔から随分正直であつたので、外の國でも賣れた



が、ドイツが一番盛に賣れた。斯ういふことをして居ると、大名等は自分の領地にある金を段々持つて行かれるのを、大に恐れたが、それを迫害するに至らなかつた。そこに又一つ妙な關係があつて、ドミニコ教團の修道僧は、獨り勢を逞うして此の滅罪切符を賣り廻はる。他の教團ではそれを嫉妬するものもあれば、又眞の義憤を發する者も多くなつて來た。此の義憤を代表し、又ドイツ人の氣象を代表して、初には滅罪切符の非難から、終に法王廳に對する攻撃を始めたものは、即ちルーテルといふアウグステノ教團の修道僧であつた。

ルーテルは、中世紀のキリスト教よりも寧ろその前に溯り、中世紀の教會は、中古以來のものであつて、本當のキリスト教の精神でないといふことを信じて居つた。吾々は今羅馬の本山を元にして居る宗教を信仰して居るが、其の實はキリストが中心であるといふ固い信仰を有つて居た。此の點はルー

ルーテル  
の主張教會の分  
裂

テルの信仰の長處ともいふべきものであり、復古運動の一つであつたが、それとドイツ的反抗の氣風とが相合して、彼等は終に所謂宗教改革の先導者になつた。此の反抗は千五百十七年に口火を切つて、是から紛擾を續け、其の結果は外の國々にも及び、例へばスイスにはカルビン、ツィングリの二人、其外スコットランドではノックス、イギリスではキクリフ、<sup>ハートマン</sup>などの改革家が、互に期せずして相應じて立ち、羅馬法王の教會に對して反抗して、初めは分離する積りはなかつたが、遂に謀反を起して、分離して了つた。其の結果、ヨーロッパの北半分は、羅馬教會の支配に屬しないで、別の教會を立てるに至つた。此のことは今日の教會の名稱や何かに關係して居る故、外の點とは比例を失するが、少し話さう。

宗教改革の結果として、各々の國々が皆國教、即ち國家の教會を作り、各々の國家に屬する教會といふものが出來た。即ちドイツの中でも、北の方の

各國家の  
教會



大名の國は、多くはルーテル派の教會で、その國々の政府が教會を司り、國王が教會の長となり、其國々々の組織が出来て、獨立した教會が出来た。イスでは今のカルビン、ツィングリの主義で各郡に各々教會を立てる。其外オランダ、スコットランド、イギリス等皆其國の教會が出来た。それを大別すれば、ドイツ、デネマルク、スエデン、ノルエーは皆ルーテル派の教會、それからカルピンの主義で出来たのは改造教會又は長老組織といつて、オランダやスコットランドなどの國教で、イギリスは又別になつて居る。即ちイギリスの宗教改革は特に國家的に出来て、改革者の主張を元にせず、イギリスの王位と傳來の教會組織とを中心にして、その國教とする。此の教會をアングリカンと呼ぶ。日本に来て居る教會で、聖公會は即ちアングリカン、日本キリスト教はカルピン主義、組合教會とメソヂストとはアングリカンから出た別派、バプテストは又別のもの、その他ルーテル主義の小教會もある。

斯くの如くにして、所謂宗教の改革の結果は、ロマ法王の權威を一部分打破して、各々國教を立てるやうになつたので、是は單に組織の上ばかりでなく、其一の特色は獨立主義、それをもう一ツ進んで言へば、個人主義になる。ルーテルの信仰の極粹は何所にあるかと言へば、吾々は教會や僧侶に依て神と交通するのではなく、吾々は唯キリストに對する信仰によつて救はれ、直接に神と交通し得る、それより外に神と接觸することは出来ない。極端に推し詰めて言へば、教會は宗教團體として存在し得るかも知らないが、それがなくても宜い。吾々個人の直接の信仰を有つて居れば、それで足るのであるから、終には信仰上の個人主義になる。カルピン派の方にも特別の説があり、ルーテル派の信仰をもう一ツ推し詰めて、吾々は直接に神を信するもので、其の信仰は神から賜はるものと解釋する。神が人間に恵を下すと言へば、他力信心といふことになる。ルーテルの方はまだ十分他力を主張しないが



カル非ンの方は極端に他力的で、吾々が信じ得るや否やといふことは、神の御心にあることで、神の御心は前以てちやんと定まつて居、澤山居る人間の中で、天國に行くのも、地獄に落ちるのも、皆神様の思召であるといふ。ちよつと聞くと、餘程偏僻な信仰のやうであるが、宗教が他力信仰の方面を極端に持つて行くと、さういふ風な妙な説になる。此の信仰について一つ話しがある。此の派の信者二人で話しをして、一人が言ふには、世の中は段々末になつて困る。是では神の恵を受けるものも少ない、此の様子では逆も天國に生まれるものはあるまい。恐らく天國に生れるものは、君と僕と二人あるのみであらう。其の中でも君は少し怪しいが、僕だけは確だと言つたといふ話がある。極端になると其れ位にまでも行くが、今日日本のキリスト教には此だけの人はないらしい。宗教改革は、一方に於ては今日の國家主義と源を同じくて、又信仰の上には個人主義の鼓吹に力を與へた。一方からいへば

マ法王の束縛を脱し、自由思想を養つて來たが、他方では個人主義になり、又國家としては、今までの如くに信仰に依つて立つといふよりも、利益主義の方に解放して、教會を離れる事になつた。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

大體に於て、中世紀から近世紀に移り變つた變動をなした點は、此の三である。此の三つが揃つて、今までの大きな精神上の團結を打破し、小さな國家を立て、それに依て個人の利益を増して行くといふ方面に向つて來たのである。此の點から見ても、近世四五百年の間に、一方には國家主義と、他方には極端なる個人主義との上に、近世の文明の基を立てた所以も明かである。

そこでもう一つ近世文明に取つて殊に大切な點は、經濟の點である。何れの時代でも經濟といふことは社會の組織や、文明の源をなして居るものであ



古代の經  
濟組織

るが、殊に近世の文明には經濟の關係が非常に大きくなつて居る。是は中世以前の、即ち古代の社會の經濟組織を見れば、今日との對照が分かる。羅馬の社會組織は實に立派なもので、交通は開け、配兵の道は能く開けて居た。併しながら生産の上から、即ち物を造り出す上から言ふと、地方的であつて、一地方の事物を外へ賣捌く、外の國から材料を持つて來て拵へるやうなことは出来ない。それ故に、生産をする労働者は、各々土着の者で、先祖以來同じ職業をして居る。中世紀になつては、此の關係は尙ほ地方的になつて來た。先に述べた通りに精神上に於ては教會の統一はあつたが、社會の組織では封建割據で、各大名の領地の境には制限があつて、物を持つて歩くには値段の十分の一の税を賦課される。其の外又封建の世の中には、交通の危険が随分多い。町人百姓は、武士の前には頭は上らない。大きな仕掛をして荷物を持つて歩いてても、武士に横領せられる、野武士も多くて、商業の交通は

封建的經  
濟

不安全又不便利至極であつた。此の様にして生産も分配も地方的になり、極く狭く各領地内に限られて居つて、労働者は極めて狭い得意を相手にして仕事をする。農民は皆大名貴族などの所屬小作人となる、土地は皆殿様の所有で、それを百姓が借りて小作人となつて居る。或は又賣物をするにしても、其賣物を我が物とすることは出来ない、根本的の資本は大名の所有となつて居る。總て大名の領地内で造り出す品物は、皆大名の爲めに造り出し、生産事業は皆領主のものとする。それ故に農工商は、皆一つの仕切りの中で働いて、自由に働くとは出来ない。さういふ經濟組織であつたから、今日のやうに労働者の間に競争の起るといふことは決してなく、極く安全で、自分の土地の仕事をするには、殿様から分け前を貰つて、土地を耕して居るのみであつた。中世紀の經濟組織は、分配も生産と共に極く地方的であつて、此の時代の經濟上の發達に力のあつたのは即ち寺院であつた。是は日本でも同様で

寺院と經  
濟上の發  
達



あるが、一方に於て大名や武士が亂暴するから、人民の財産は安全を保てないが、寺だけはその治外法権とも言ふやうなもので、大きなものになると數百人位の修道僧が集つて居る。少くとも百人二百人は集つて居つて、そこで葡萄を植ゑ付けたり、牧畜をしたり、或は農業をして、總て自分の力で生産して居る。今日でも寺の組織は皆此の組織でやつて居る。さういふ修道院の周圍には一の都會が出来て、其處には商人も集つて来る。今日のヨーロッパの都會で、此の類の修道院を本にして出来たものは少くない。さういふ工合にして、各地に經濟上の中心を作つて、是が大名や司教などの地方的勢力の基礎が増す本になつた。初めは自分の教會に御奉公する積りでやつて居たものが、其の結果は、妙に教會に反對して、自由競争をするやうな氣風が出て來た。斯の如くにして經濟上の組織は、中世紀には修道院や教會司教地などの力に支配せられた。

## 自由市

ハンザ同盟

その外に、商業の上から、大名の領地以外に獨立の都會が出来た、即ち大名の配下に居ないで、自治自由の都會が又經濟上政治上に有力になつて來た。その始めはイタリヤのエネチアやゼノアなど、海上の都會が、商業と共に、海軍で海上を支配する様になり、それからドイツでも、海上の都會から、内地にも自由都會が發達して、ハンザ同盟といふのを造り、共同して大名の侵害に反抗し、商業を元にする國家組織を小規模にやる様になつた。此が近世の商業や政治の起源ともいふべきものである。今日ドイツでもリュベック、ブレーメン、ハンブルヒの三市だけは、その儘で残つて居て、其の市長は、全然大統領と同様である。斯ういふやうに自由獨立の都會が各々經濟上の中心になると共に、自由の氣風を養ふ本になつて居る。此の氣風は丁度徳川時代に於ける大阪を例に取つて見れば能く分かる。外の城下には、家老でも悪いやつが居ると壓制されるが、自由市にはその憂がなく、自由の氣象



が發達して來て、是と共に技術文學も盛に起つて來、又經濟上でも是等の都會が商業上の勢力を占めるやうになつて來る。それからもう一は、此等の自由市には商賣なり工業なりの組合が出來た。それはギルドと言つて、今日日本にも商工業の組合が出來て居るやうに、組合を作つて各々團結し、自分の利益を保護するやうになつた。それ故に生産の側から言へば、中世紀の頃までは借地の組織であつたのが、中世紀の終にはギルドの組織が勢力を得て來た。之をもう一つ發達すれば、即ち今日の自由競争のやり方になつて來る。自由都會の發達に加へて、先に申した新大陸の發見や植民政策の發達からして、經濟組織が一變し、小さな大名が立つて行く事は出來ない、それで段々今日の所謂國家が團結し初めて來た。一つ國家の利害から云へば、此の様な自由市やギルドを獎勵して海外發展の方便にする。今までは國王や大名の侵害に反抗した都會が、今度は國家の用に立つ。大名がつぶれて今度は

ギルド

近世國家  
の團結力

一の國になり、是等の自由市が先導になつて、一國の文明を作る、そこで今までのギルドの制度も亦、尙ほ大仕掛のものとならざるを得ない。今までは一の都會の範圍内に限られて居たのが、大きな組合になる、此が尙發達して今日のトラストや勞働組合にもなつたのである。

資本

もう一つ資本の關係を見ると、古代から中世にかけて、資本に對する利息金をとるのが不道德であるといふ議論が行はれ、キリスト教徒たるものは、金貸しを許されなかつた。然るに新大陸の發見や植民發達の結果、海運が發達して來たので、此方の土地にある物を買ひ占めて、船に積んで持つて行く、其間には時日が掛かるから、餘程金のあるものでも、現金に拂つて買つて行く譯には行かない。彼方へ持つて行けば利益のあるものと極まつて居つても、澤山は持つて行けない。そこで運送が發達すると共に、資本に對する利息は拂つても、金を借りなければならぬといふことになつて來た、然るに教



會はそれを禁じて居る。そこでこの困難に處するためには所謂パートナーの組織が出来た。是は一緒に仕事をするという意味で、一人甲の土地に住んで居る者が、其の地の産物を乙の地へ持つて行つて高く賣るに當つて、この地の者と共同して物品を買つて、持つて行つて、利益を分配する。丁度今日の荷爲替のやうなものである。是は教會の法律を脱ける爲めにしたのであるが、事實に於ては、共に營業するのと同じことになる。資本主が資本を共同して事業をするといふ風は、此の様にして段々起つて來た。其の中に事業も大きく、配當額も殖えて來、此の組織が近世になるに従つて大きくなつて、一方に於ては分配も盛になつて來れば、生産も多くなつて來る。斯の如き組織を、初め商業家の方のみでして居たのであるが、今度は工業の方にも使ふやうになり、技師は技師として働き、株主は資本を出して、其金の利息を貰ひ、又職工は職工として働いて、賃金を得るといふ方法で進んで來た。一番

初めは、十八世紀の頃にオランダに初まつて、イギリスのマンチエスターにも及んで來た。

此の頃、十八世紀の後半に、イギリスは印度を征服して、印度の綿を持ち込むで、それを製造するやうになつて來た。工業と言つても、初めは水車でやつて居たのが、段々蒸汽機關でやるやうになつて來た。蒸汽機關の應用は今までから發達して來た商業上經濟組織の變化に加へて、此が工業經濟の上で大變動を及ぼし、所謂工業革命となつた。機械工業の起源はイギリスにある。イギリスでは、鐵の需用が盛になつて、鍊鐵のために石炭を益々多く掘り出す必要が起つて來た。石炭を掘つて居ると、地中に水が溜るから、其の水を抜き出す方法を考へた。所が偶然にも水を抜き出すに蒸汽を應用し始めた。初めは巧く行かなかつたが、段々改良して到頭成功したのが蒸汽機關である。さういふ工合にして綿の製造にも水車を使つて居つたのが、蒸汽機



關するといふやうになつて來た。十九世紀の初めには、此を應用して鐵道が出来て、生産物の運搬に使ふやうになり、次に之を海に應用して、今まで船は風がなければ役に立たなかつたが、風がなくても、風に逆つても行ける蒸汽船といふものが出来て來た。蒸汽機關の、初めは生産だけに使はれて居たものが、今は分配交通に使はれるやうになつた。是に於て生産分配總ての組織は一變した。此の變化は、イギリスが一番初めで、それから段々と他の國々に及んで來た。此間の變化は非常に早い。ゼームス・ワットの蒸汽機關を發明したのは、千七百八十五年で、之を船に使つたは米國人で千八百四十年頃。即ち三十年ばかりで之を海に應用するやうになり、航海業の革命を來したのである。

斯の如き譯で、生産上に非常な革命があつたから、従つて資本の方面に於ても、變化が行はれざるを得ない。即ち爲替金を出して利益を得るといふ組

織は一變して、株式組織となつて來た。其の又結果として自分自らは事業に携はることなくして、金を有つて居る者は、唯資本を投じて、資本に對する報償を得るといふ一の階級の人間、即ち資本家なる者が出来た。それと相並んで、勞働の方では、特に勞働者といふ階級が出来た。昔の勞働者は、自分が資本主であつて同時に商人であつた。例へば鍛冶屋なら、自分で原料を買つて來て、自分で製造して、それを又自分が賣る。今日でもまだ未開の地では斯ういふ組織であるが、世の中が忙しくなるに従つて、今までのやうに個人々々でコック／＼やつて居るのでは、間に合はない。一つの仕事を一人で長い間掛つてやつて居るのでは、間に合はぬから、早くて、仕事が多く出来るやうにする爲には、どうしても分業といふことが起つて來る。分業にすればコップを一つ拵へるにしても、材料を集めるもの、製造するもの、それから賣るもの、各業を分け、早く又大仕かけに出来る。又製造の中でも、或る種



類々々で分業をやつて行くと、仕事が早くて多く出来る。そこで、労働者は労働者として、自分で資金を投することなく、資本家が資本を投じて居る事業があれば其所に行つて労働して、賃金を貰う。労働者の階級といふのは、即ち賃金貰ひで、此が資本主とは全く別のものになつて來、そこで労働問題といふものが起つて來た。もう一の原因は、さういふ經濟組織の變つて來たと共に、新大陸に黄金が澤山出て來、之を貨幣にして、是が段々に蓄積する、是に於て今までの物品交易は出來なくなり、又物價が上つて來た。その上に人口の繁殖と共に、一般人民の生活問題も困難になつて來る。資本の組織が大きくなつて、資本主の專權が甚しくなり、労働者は之に反抗する。所謂労働問題なるものは、此の様にして近世の文明と共に起つて來た。

古代の社會から今日に至るまで經濟の大體を見れば、其の間には色々な變化はあるが、兎に角、古代の人は各々自分の仕事を樂んでする風があつて、

近世の自由競争

労働問題

各々其の業に安じて、自分の先祖代々の業をして行く。我國でも徳川時代には斯ういふ組織でやつて居つた。所が封建制度が破れて、國際の交際と共に、生存競争が生じて、斯の如く資本家と労働者の争が生じ、又資本家と資本家の間でも、トラストのやうなものを組織して、互に自由競争をするやうなことが起つて來た。是の如くにして、近世文明は個人の自由競争と共に主我慾の増長を助長して來た。

更に之を思想の側で觀るに、中世紀の哲學は實在論が元になつて居る。實在論に對して、新なる方面に向つては名目論となり、其の結果は歸納的方法を學問に使つて來た。科學の研究が出來て、之を思想の上に適用すれば、則ち理性主義が出て來る。何ものも理性だけで分かり、理性が承認するものでなければ正しいものでなく、貴ぶに足らないといふ主義である。それ故に

哲學の方面

理性主義



此の主義を極端にして来れば、信仰は理性と全く反對のものとなり得る。信仰の破壊、權威の墮落、尊敬の缺乏、此等は理性主義、又科學萬能主義の惡結果で、而かもその主義を貫けば、自然に出て来る結果である。即ち今まで傳へて来たものは、歴史的の信仰や傳説が混つて居る、それは理性に適つたものでない、だから理性的に理屈に適つたやうに作り直さなければならぬ。例へば國家の組織にしても、今までの歴史の因縁がからまつて出来た國家は、人間の理性に背いたものである。斯の如き國家が存在して居るのは、理性の判斷に照らせば、不當な事柄であると唱へるやうになつた。此の主義は十八世紀に起つて、色々の方面に及んで新哲學が組織された。之を啓蒙の運動と稱して居る。啓蒙運動の歸着する所は、總て歴史、其の他因縁から成立つたものでなく、總て吾々の理性から作り出さうといふ主義であつて、之を極端に言へば、個人主義である。

## 啓蒙運動

## 民約説

此の主義を社會組織の上に應用しては、所謂民約説にもなる。人間が元來善であつても、又は惡であつても、國家社會は、人間の共同利益を目的にしなければならぬ。その組織は歴史上の因縁で色々混濁して居るから、それを淨めて、自然に應じた組織、人間の理性に基いた組織にしなければならぬといふ事になる。イギリスのホッブスは、人間は元來狼の様なものであるとし、それをその儘棄て、置くことは出来ないから、大勢の人が集まつて國家といふものを約束に依つて作つたと見てゐる。此の説は即ち、性惡説に基いた社會説であつて、それを應用すれば、社會の組織や道德は、皆便宜から作つた約束事で、此の便宜を調節するのは即ち理性であるといふ事になり、そこで一方には道德に本來人性に基いた基本だとか、道心だとかいふ事があるのではないといふ事になり、又一方には、現在の社會の虚偽を痛撃して、我々の理性で之を組み直さうといふ革命主義になる。ちよつと附けて置くが、我國



では、加藤弘之博士が大體ホッブスと同じ説を唱へて居られる。加藤先生は尊敬すべき先輩であるが、先生は斯ういふ説を堂々と教育社會に説いて、道徳に永遠の基本のある事を否定する主義である。ホッブスとは違つて性善説に基いたのは、ルソウであるが、人間は元は善であるが、歴史上の因縁で今日腐敗墮落の社會を作り出した。それ故今日の社會を革命して天賦人權の自由を回復すべしといふ。ルソウの此の民約説は、即ちフランス大革命の口火になつた學説である。

此の理性主義は即ち近世科學の發達と平行して、人生道德の上に、古來の權威思想を破壊し、個人の考へを萬事を中心にするのであるが、それが學説としてのみ行はれる事は出來ず、思想の浸潤する所、いつかは終に爆發すべき運命になつて居た。ところが社會の上で、斯ういふ學説の實行を激發するやうな機運が出來た。即ちフランスの王室は、その頃の強國で最も有力者で

思想の爆  
發  
ス  
ラ  
ン  
ス  
命  
命

フ  
ラ  
ン  
ス  
の  
ル  
イ  
王  
朝

あり、十八世紀には、王ルイ十四世(一六四三—一七一五)の如きは、非常な人傑で、人民から神の如く尊敬されて居た人である。一體フランスの人民は尊王心の厚い人民であつて、ルイ九世の時から大革命まで、五百年以上、王室の尊嚴は益々加つて來、その上ルイ十四世の長い治世を経て、其間に佛國は燦爛たる文明が起つた。然るに盛の極は衰の始めで、王室が尊嚴すぎて、段々人民に遠かつて來、王室の尊嚴を笠にきて人民をいぢめる貴族や僧侶があり、此の二が王室の藩屏と稱して、王室と人民の間に垣根を造つて了つた。彼等は王室の御威光を藉りて、立派な建築を彼方此方にして、其宮殿の中で宴樂に耽り、それを以て王室の尊嚴を増す所以であると思つて居た。其の結果、フランス全國の土地は三分の一以上は、僧侶と貴族の財産で、後の二が一般の社會の人民の有であり、貴族等は租税を拂はず、人民のみが獨り國費を負擔して、王室や貴族の奢侈の入費を拂ふ。そこで中等以下の位置に居る



佛國革命  
時代の美  
術  
ロココ  
風

ものは不平満々として居つた。所に持つて來て、前に言つた理性主義の哲學を應用し、現在の國家社會に對する疑惑に陥り、それと不平とが一つになつた。此の如き状態であるから、この時代の美術は、やはり人工的で、貴族趣味のロココといひ、全く天然とかけ離れて、こてくの飾りをするのみならず、一般人民の趣味とは全く合はないものであつた。序でながら、申して置くが、甚だ悲しむべきことには、日本の東宮御所の技師が、何故か此ロココ風をまねした。西洋各國の宮殿は、多く十八世紀のフランス式に出來て居るので、我國の技師先生はヨーロッパの彼方此方を歩いて見て、此のロココが宮殿の建築法だと思つて、それをまねたのではないかと思ふが、是は悲しむべきことである。日本でも、徳川時代の建築、日光などの建築は結構であつても、こてくの外に趣味はなく、その屋根が大き過ぎるなどは壓制社會の氣風を代表して居る。ロココ風の庭作りもその通りで、眞直な道を

造り、圓い噴水を造り、曲がりくねつた木を植ゑ、生垣を造り、總てが貴族趣味である。繪畫や彫刻もその通り。そこでルソウの様な天然主義から見れば、此等の氣風は特に反抗心を激發せざるを得ない。即ち十八世紀の末にはあらゆる原因が相合して、フランスの社會は不平満々の有様で、終には爆發せざるを得ない様になつて居た。

個人主義、天然主義が、壓制政府、貴族横暴と衝突した結果、人民が遂に王室に反抗してフランスの革命となつた。是は千七百八十九年に起つて、さすがのフランス王室も倒れて、社會は混亂に陥つた。その混亂の中からナポレオンが出て、其後を一統した。ナポレオンの爲めにヨーロッパ各國は大恐慌を來したが、各國同盟軍を作つてナポレオンを亡して了つた。其のことは詳しく話す必要はないが、兎に角フランスの王室が一朝にして轉覆したのは、王室の方から云へば自業自得であるが、あの革命を起したのは謀反思想、

革命後の  
動搖



反抗思想であつて、此がヨーロッパ全體にひろがり、是が彼方此方の戦争となつて現はれ、其の結果として、イギリス風に倣つて立憲政體が各國に出來たのである。それ故、ヨーロッパ大陸の立憲は、王室と人民とが調和策を講じた結果といつてもよいもので、その案配のために今日でも尙ごたぐ／＼して居る國もある。兎に角フランス革命は、十八世紀から十九世紀に亘つての大事件で、此の爲めにヨーロッパの人心は非常に動搖を來した。今日の文明は其の動搖を來した後始末をしやうと掛つて居るのであるが、社會の上で色々の關係から今までの哲學上根本的問題、經濟上の問題、それ等のものが皆一緒になつて來たので、なか／＼それを解決することは出來ない。日本でも西洋文明を容れて、その結果、それ等の思想や又困難をも一緒に輸入して居るが、兎に角、此等の問題は單に社會や經濟の組織だけでなく、思想の根本と關聯して居ることを忘れてはならぬ。

斯ういふ風に、近世文明の由來は種々の變遷を経、又雑多の問題を含むで居るが、其の間に起つた文學、美術等は矢張紛亂を極めて居る。一例を文學の上で言へば、始めは古典的の形式であつたのが、ロマンチックとなり、今日は寫實、自然主義といふやうに、所謂新しい思想が起つて來たのである。今日の自然主義なるものは、一方はルソウの自然主義思想から出て居る點もあり、又同時に近世の複雑な社會に起つて來た苦悶の聲も一緒になり、その上藝術の上で大思想大理想が缺けて居る墮落の傾向と一緒になつた結果である。近世藝術の墮落について、一例を擧げて見れば、婦人の裸體畫の如きはその一つである。人間の身體を描くときに、中世の畫師は、着物を着て居る人間を書くにも、下繪には裸體の繪を書いて、それに着物を着せるといふ心持で書く。それ故に人間の身體美を描くには、裸體畫の素養修練がなけ



ればならぬために、その稽古には裸體畫を畫いたのである。今日では、素養にすべきものを最終の目的にし、その上に大作の一部として意味のあるものを、それだけ獨立にし、即ち断片的に裸體畫を畫き、或は挑發にも之を用ゐる。此は藝術の廢類と思想の墮落と相伴つた現象であるが、日本ではそれを有り難がつて、それが即ち西洋美術だと思つて居る人も少くない。文學でも此と同様で、今日の自然主義文學の如くに、断片的な刹那的な、而して又單に一時の發作の如きもの、繪畫の方での印象主義に似た様なものゝ出て來たのも、近世文明の精神が大理想大信仰を缺いて、人心が切れ／＼になつた反映である。それが近世的だ現代的だといつて喜ぶのも、やはり一時の發作ではあるが、社會や道德の方面で近世文明の難問が解けない間は、それに似たものが又相次いで現はれるは必然である。

近世文明の中で異彩を呈して居るのは音樂のみである。音樂は元宗教から

出たものであるが、其の風を受けてドイツで非常に發達したのである。西洋の音樂は、姿、形を現はして、踊や何かに用ゐるやうなものと違ひ、又或る言葉や歌の意味を言ひ表はすのではなく、人の心情を直接に言ひ現はす方に發達したのである。吾々の心情を直接に音響に依て現はす、此の點に於て日本の音樂とは根本に違つて居る。西洋の音樂は、元は寺で奏するもので、人が口に言ひ能はざる所のもの、即ち心情の聲、信仰の奥底を表はすといふ傾向で發達したものである。それ故に、是は個人の自由を許された時代には外のものよりも發達し得る。此の様な音樂の大成に力のあつたのは、ベートーエントワグネルとて、ワグネルは通常の音樂を番組音樂と稱し、心情の音樂を氣分音樂と稱して、大にその作を出した。併しながら此方も今は少し後戻りをして、フランスでは、所謂る情趣音樂の方になつて來た。一體近世の音樂は、真心の熱情の方面に於て頂點に達して來た、是が又違つた方に進むか、



或は墮落して丁うか分らぬが、兎に角音樂だけは、近世の文明の中で最も特別なる發達をして居る。又近世の哲學には色々な説が出て居るが、之に就てはもう一つ進んだ解釋をしなければならぬ。今まで中世紀に一時出來掛けた統一主義を復興し、其の上に今日の個人主義を立てやうといふものが出て來るや否やは、今後の問題である。

\* \* \* \* \*

今日の勢として、どうしても我々は西洋文明に接するが、受け目に之を受けるのでなく、進むで之を攝取して、之を自家の囊中の物としなければならぬ。さうでなくば、已むを得ずして之を受け入れるといふ事になつて、今日見る如く、善よりも惡の方に多くかぶれる事になる。此の事を始終心に留めなければならぬ。さうすれば吾々が西洋文明に對して、之を容れるにしても、排斥するにしても、一定の主義方針を立て、活動的にしなければならぬ。

西洋文明  
に對する  
吾人の覺悟

ぬ。こちらが主人となつて、批判取捨をし、如何なる方面を打撃するか、又容れるにしても、如何なる覺悟を以つてするか、之に對しては吾々の任務は非常に重大なものが横つて居る。その解決に就ては、我々の信念が一の大きな鍵を與へなければならぬ。若し其仕事は吾々日本國民に出來なかつたならば、始めに述べた如く、徒に東西文明の統一といふやうなことを言つても、間に合せの安上りの一時的のものは出來るか知らぬが、眞個の統一は出來ない。苟も東西文明の統一をしようといふ覺悟を有つて居る國民ならば、自分の國の文明は固より、西洋の文明に對しても、根本的の方面を尋ねて、其の由つて來る所を究め、それに依て越へべき所を定めなければならぬ。而してそれには、こちらの思想に確乎たる中心主義があつて、他の真相と由來とを看破する明がなくてはならぬ。其の邊は吾々の最も努力を要する點であると思ふ。

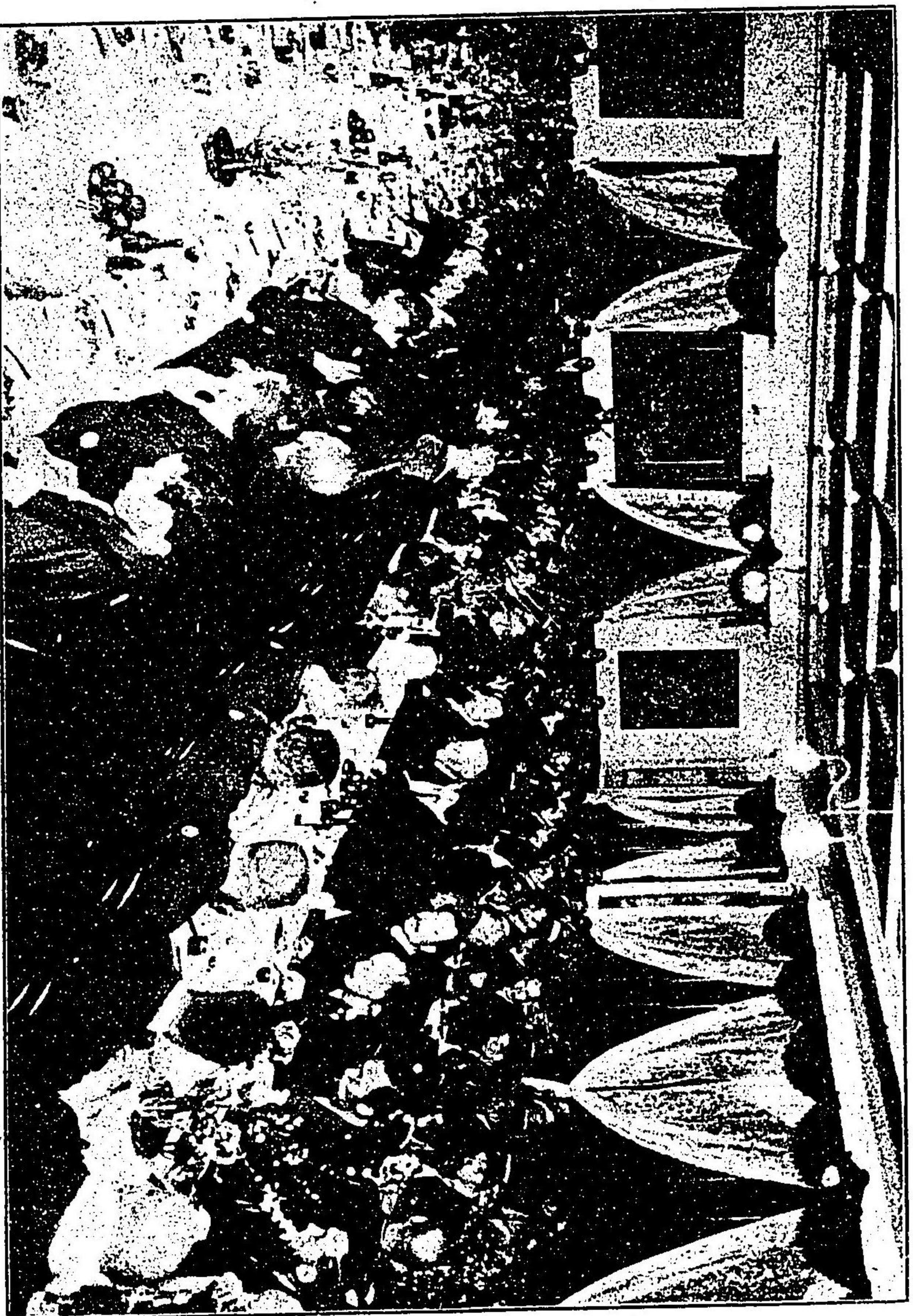


外篇第三

三教會同の觀察



宗教家教育家懇親會



明治四十五年二月廿八日、上野精養軒にて



### 三教會同の觀察

明治初年

明治政府の宗教政策には幾何の變遷はあつたが、要するに、一方外國宗教に對する態度と、他方國內人心の統一といふ二點が錯雜して現はれたものである。即ち明治初年の排佛毀釋と神道樹立とは、王政復古を精神の上にも貫徹しやうとして、古代王政の基本は神道の祭祀にあつて、祭政一致は王政の一要素だと解釋したから出て居る。然るに王政の復古は單に古代に復るのみでなくて、實は開國維新の大精神と結びついた大運動であつたから、神道祭政の古に返るのみでは、到底此の新時運に乗する力となり得ない。明治二年六月には、『今度、祭政一致、天祖以來固有の皇道復興被爲在、億兆の蒼生、報本反始の義を重んじ、敢て外誘に蠱誘せられず、方嚮一定、治教浹洽候様被爲遊度思食候』といつて、一切外來の思想を謝絶しやうとした方針は、之

祭政一致

(587)



## 政教一致

を貫き得なかつた。といふのは、要するに、形式は出来ても、精神が副はな  
いから、その感化に實力がなく、總て神道の祭祀で通さうとしても、實際の  
信仰と新時代の需要とは、之を充たし得なかつたからである。此に於て祭政  
一致は轉じて政教一致となり、神祇官の下に別に宣教使を置くに至つた。此  
に於て國家徳教の思想に幾分か内容を與へやうとし、二年の後には、大教宣  
布の旨意となつて現はれた。「夫れ人は萬物の靈、神明最も惠顧し給ふ所のも  
のなり。……故に大教を宣布するもの、誠に能く斯旨を體認し、人情を省み  
て之を調攝し、風俗を察して之を提擧し、之をして感發奮興し、神賦の智識  
を開き、人倫の大道を明にし、神明を敬し、其の惠顧の洪恩に負かず、聖朝  
愛撫の聖旨を戴き、以て維新の隆治に歸向せしむべく候。」翌五年宣教使は教  
部省となり、その下に大教院は置かれ、敬神愛國、天理人道、皇上奉載の三  
條を國民教化の原則とする様になり、それも翌六年教部省の廢止と共に大教

## 宗教の放棄と壓迫

院の解散となり、神佛兩教各々自治自動を許される事になつた。此より以後  
明治政府の宗教政策は、所謂る手を焼いた姿となり、放任といふよりは寧ろ  
疎外となり、消極的壓抑として、廢佛毀釋の裏面に出、而して他方には文部省  
の教育を以て國民統一の力とする萌芽は、此に見え初めた。但し明治五年八  
月學制發布當時の教育方針は、殆ど有用の人を造るといふ一點に歸し、人々  
が其の産を治め生を遂げるのは、『身を修め智を開き才藝を長ずるによる』と  
云ふ宣言であつた。此より後、國家教育の方針を宣明したのは、實に明治十  
四年にあつたが、兎に角、國民思想の統一といふことは、始め宗教の方面か  
ら廢佛興神で着手をして、その失敗から教育の整理に進むたのである。それ  
から後、國家教育の針路については、今茲に述べない。

明治初年の失敗は、此の如く復古と共に進取といふ大勢力があつたのと、  
又一には佛教の長い間養つて來た信仰の力が、人心に消え失せなかつたとに

## 復古と開國の關係



因る。然るにその後佛教の勢力は大分回復し、その上國家教育の方針は確定しても、尙ほ國民教化の上に大缺陷を免れないのは、畢竟、開國進取の國是を貫く以上は、西洋の文明に接せざるを得ず、この接觸から來る世界的の強壓が加はつて居るためであつて、この強壓は、先づ切支丹禁制の問題となつて現はれて來た。キリスト教宣教師の渡米は、開國後五年、安政六年（一八五九）。慶應元年（一八六六）には長崎に天主教の會堂も立つたが、明治二年に浦上村天主教徒の事から外國との交渉となり、切支丹邪宗門禁制の文字は改めて、切支丹并に邪宗門となつたが、此も明治六年には撤去して、先づ信教の自由は保證を得た。此と共に世は太陽曆の世となり、三年の後に日曜日公の安息日と定まつた。此等の事歴は外面法制の問題に似て居るが、その裏面には實に開國進取といふ大問題が横はり、此より後、西洋實證哲學の輸入、民權自由の説、歐化主義の動搖など、皆同一の潮流が色々の方法で現はれたものである。此等は勿論この潮流が淺薄に現はれたものであるが、要するに本論第一に述べた如く、國家の統一といふこと、外國思想との關係の一頁であつて、その後憲法は明かに信教の自由を認めたと係らず、卅二年の宗教法案は、外教と佛教とを同一に扱ふといふ廉で反對を招き、蹉躓に終つたのみならず、政府部内にも一般民間にも、やはり基督教に對して嫌忌の情が蟠まつて、そのまゝになつて來た。

切支丹禁制の撤去

外國思想の動搖

宗教の疎外と信仰の低氣壓

兎に角 明治の宗教政策は、佛教に對しては疎外、神道に對しては曖昧、キリスト教に對しては敬遠、此の様な曖昧の態度で通して來、而して他方教育に依る國民の統一には、又内容實質の上で、種々の難關が横はつて居る。此の如く政府として宗教に對する態度が曖昧であるために、人民の信仰には一種低氣壓的抑壓が蔽ひかゝり、而して教育社會に横流して居る宗教排斥の空氣は、一般人民の宗教的感化と相背くか、然らずば一般の信仰は迷信に委



し去るのみならず、又教育者自身に近年勃興して來た求道の精神に一種の箝制を施し、此も氣風沈淪の一因となつて居る。此の如き由來と状態とであるから、政府の宗教政策、即ち政府と宗教團體との關係のみならず、内容に入つて國民教育と宗教と、道德と宗教との關係など、この低氣壓を排除して晴天新鮮の空氣を入れる必要に迫られつゝある。而してこの中で最も着手し易いのは、政府の態度を宗教行政の上に明かにするにある。此が三教會同を促した一因であつて、或る人が床次次官の提案を評して、明治初年以來政府の執り來つた誤れる消極的壓抑の政策を懺悔して、薩長先輩の罪亡ぼしをするものだと評したのも決して不當でない。

三教といへば、古支那では儒道佛の三つ、日本では近年まで神儒佛の三であつたが、儒教は團體的勢力のないものとして自らその意味を失ひ、今日

本では神佛二教とキリスト教とになつて來た。古來東亞で色々の三教の衝突や調和は述べる要はなく、又明治以後今の三教相互の關係は一々之を述べない。然し概括して云へば、大教院時代には、佛教は神道の壓抑を受けたが、後に之を脱し、その後西洋思想外國宗教の勃興と共に、神佛二教は一時（明治十年代の後半）同盟して、キリスト教を外教として之に當つた。然るに廿年代の後半になつて、所謂國民的自覺の興奮と共に、神道は再び佛教を見放し、國教を以て自ら任し、佛教は自分のみで自ら立場を守るか、又は一般の無宗教に對してキリスト教とも握手をすべき位置に立つた。信仰の内容には少しも入らなかつたが、この一種の宗教聯合は明治廿九年に宗教家懇談會となつて現はれた。その出席者は少數（五十人位）であつたが、中々種々の方面の反對を排して此の一席の會合は、宗派根性を棄て、互に談り合つて見やうとの一種の握手を遂げた。而してこの會の成立し得たのは、内部の事情



に加へて、その二年前に開かれたシカゴの世界宗教大會が、一種の媒介になつて、この懇親會に出席した神道の柴田禮一氏や禪宗の釋宗演師は、それ以來の知己であつた。この懇親會が後二年(卅一年四月)にシカゴの大會長パロース氏を歓迎するために再開して、今度は六十人ばかり出席者のあつたのも偶然でなかつた。その後ロシヤとの戦争の場合に(卅七年五月)日本の總ての宗教家が會合したのも、一場の演説會、何等の效もなかつたと評する人もあるが、兎に角、三教の主導者が面を見、話しを聞いたゞけでも、全くの無意義とはいへず、その上に、卅八年の日比谷騒動で焼かれたキリスト教の會堂に、佛教者が慰籍の金を送つたなど、單に一片の形式とは見られない。

之に加へて、東京文科大学の宗教學科は、勿論宗教の學術的歴史的研究をするのが目的であるが、而かもその卒業生が各々自分の宗教を奉ずると共に他を知るといふ點で、一種の宗教疏通の力を呈したことは争はれない。その

學科が卅八年に卒業生を出してから(それ以前にも同様の卒業文學士はあるが)昨年まで卅七人の卒業生中、佛教家が二十五人、神道家が二人、キリスト教者が六人、無宗派が四人、その中には今實際傳道事業に従事して居る人もあれば、又キリスト教から佛教に轉じた人もあり、佛教者でキリスト教を研究して居る人もあり、兎に角、宗派心を去つて互に理會し同情するといふ氣風は、此の小範圍内だけでも行はれて居る。諸の宗教は各々自己の特色を發揮すべきであるが、又宗派根性で相容れず、相争ふは却て眞摯の信仰を害し、又實に國家人道の不利であるといふことは、世界一般の思想界が之を認め、而して文科大学のこの學科はそれを日本に代表して居るのである。他の大學并に外國大學の事は、之を略するが、今まで最も宗教の一般研究に反對したドイツ大學にも一二宗教學の講座をおいた如き、最も注意すべきことである。三教會同反對者の中には、今回の事たる、要するに文科大学宗教科一



派の空論が行はれたのだと憤慨したのもあるが、此を一派の事、空論と見  
るのが誤りであつて、實に世界思想界の事實なのである。

三教會同  
の意義

所謂る三教會同は、會同であつて合同でないことは勿論のことであるに、  
世間が往々にして合同の計畫など誤解したのは、實に各宗教とその遍通性  
との關係を思はないから出たことである。この點は、床次次官の私見宣言に  
も、又三教者の決議にも明白に現はれて居るが、尙ほその意味と結果についで  
は後に述べる。兎に角、三教會同は決して合同の希望から出たものでなく、又  
此の如き希望が行はれるものでもない。然し同じ人類の宗教として、異宗教  
も或る點では共に同じ人情の根から出たとすれば、眞善に於ては相同し、偽惡  
に於ては互に矯正し得ない筈はなく、且つ又同じく日本國民の感化を以て自  
ら任ずる以上は、そこに共同の問題があり、それに對する方針解釋乃至實行  
方法に於て、共同し得ないまでも互に他山の石となり得る事があるに違ひな

歴抑の排  
除と各宗  
教の自由  
發展

い。然るに今までは、一般に宗教に對する消極的壓抑のために、各宗教は自  
由にその特質を發揚し、力量を延ばす上に障害が多く、且つ政府も社會も共  
に宗教家を繼子扱ひにして來た結果、宗教家の中には退嬰或は反抗の繼子氣  
質があつて、それが宗派割據の弊を増長して來た。三教會同に對して反對の  
中には、宗教の信仰は絶對であるから他と相見える餘地はないといふことを  
理由にした者があるが、此は實に信仰といひ絶對といふ事の意義を偏屈にし  
た者(この事は後段に)なるのみならず、此の如き偏屈は又實に宗派根性にも  
馴致せられて居る者である。此等の反對論は暫く別として、宗教の根本義と  
又此の國家に對する宗教の天職の上から見て、諸の宗教が相互に自由を許し  
て公明に相競ふと共に、又互に尊重すべき點を尊重するのは、即ち開濶の天  
地に宗教が自由活動をする所以である。而して此の如き意味での三教會同は  
明治廿年代の末から多少づつ、宗教家(少數ながら)の中に必要を感ずる者が出



來、それと政府政策の必要と時運とが相合し、床次氏の大膽で又公明な提案に依つて實現せられたのである。今度の會合が一時の花火的現象でない事は、此等の觀察からして明白である。

そこで尙ほ進んで、政府當局者が三教會同の提案をなし計畫を遂げるに至つた原因については、色々の近因もあらうし、それ等の觀察は、明治思想史の上で興味ある一頁であるが、それ等の事は略して、茲に一つ國家と宗教との關係について考へて見なければならぬ。所謂る政教の關係といひ、又床次次官の云はれた宗教と國家との結合といふのは、一方は制度の上で、宗教團體の國家に於ける地置といふ事と、一方には國家の理想、人民の信仰内容から見て、それと宗教との關係といふ事とになる。

多くの人は、政教分離は文明國の趨勢だから、日本も其の趨勢に逆行して

國家と宗教との關係

政教分離の意味

はならぬといふ考を持つ。新聞などの批評に、此の主義を唱へた者を見るが、單に政教分離といふ形のみを見て、其の内容に就いては考ふる所なく、又西洋諸國の實情に就ても研究を缺いて居る。政教分離とは政府と宗教團體との區劃を明瞭にするとの意味で、此の意味なら勿論何れの國も政教分離に傾きつゝある。けれども此の問題とても決して簡単な問題ではなくて、フランスの如きは、千九百七年の分離法で之を斷行したが、其法の實行には色々の困難に遭遇して居る。政府と教會とを分離するのは、必要の政策だが、分離するものは必ずしも背反ではない。それをフランスでは分離が直に背反嫉視と爲つて困難に陥つて居る。アメリカの如きは背反ではない、分離しつゝ宗教には十分活動の餘地と自由とを與へて居る。其の他各國の事は一々述べないが、日本は制度上で、先に述べた如く、明治六年の大教院廢止以來、分離に似て干涉にもなつて居る如く、又保護に似て嫉視にもなる様な、曖昧な態度

日本の曖昧



で今まで持續して來た。約説すれば、宗教團體は、何れも皆繼子として扱はれて來た。全く無關係でもなければ、又區劃を守りつゝ、相助くるでもなく、何れの國にも見ぬ妙な政教關係で來て居る。今度の問題に關して佛教側の人は、頻に耶蘇教は非公認教だといふ様な事をいふけれども、繼子扱ひに至つては、三教何れも異なつた處がない。今日が此の關係を明にすべき大切な時機である。其の所以は、一方には宗教以外の神社に對する整理保存、或は獎勵が近年漸次歩を進めて來て居る。それ故、今に於て一方に神社と國家との關係を明かにすると同時に、他方で宗教團體と政府との關係を明白にすべき必要が迫つて居る。世評には、昨年は神社崇敬で、今年は宗教獎勵などといふ勝手な評を下すものもあるけれど、元々此の二つは相並んで進むべく、神社崇敬に次ぎ、宗教の取扱は當然續いて來べき問題である。單に分離といふ空虚な言を以て、此の問題を解釋し得る様な考のものは、現在分離を行つた

明確な處  
置の必要

フランスの實狀を研究し見るが宜い。

制度上からの政教分離は必要としても、尙ほ進んで國家の統治と人民の宗教信仰との關係、即ち國家と宗教との實質的關係に就いては、一層複雑で又深きものある點を見なければならぬ。此の點では、宗教の信仰は一個人の事柄だから、國家とは何等の關係なしといふ見方がある。けれど此の考は元來社會主義から出たもので、社會を以て、單に個人が相互の利益の爲めに約束し合つて、集合した團體だと思ふ見解から出て居る。けれど國家なるものが決してかゝる簡単な團體でないことは、日本の思想家の皆認めて居る所であらう。細かい議論は別とし、吾人の所見では、國家とは一系の文明を有し之を發達せしむる團體である。換言すれば歴史と理想とを共にする人民の結合である。歴史と理想との内容が即ち國體となる點であつて、此の方面の自覺を有せぬ國民が懸て團結の薄弱なる國民である。國家の事業制度は、一

國家の統  
治と人民  
の信仰



方には人民の直接の利益幸福を増進すると共に、過去には歴史、將來には理想を中心にし、鞏固にして進取的なる團體を造るに在る。是が即ち國家の魂である。古來何れの國家を見ても、此兩方面を併せ得た國家は強大を致して居る。

此に於て國家と宗教との實質的關係を生ずる。何となれば宗教には色々の方面があるにしても、其の根本性質を言へば、人々が自己の生命の依つて出る源を尊重する心と、其の心で此の世に處し、又現世彼岸に亘つての理想を與ふる力である。例へば現在日本に問題と爲つて居る祖先崇拜の如きは、此の宗教心が、自己の肉體、家族、種族の源に對して發したものである。或は又此の源を推して、一切萬物の父なる神といふまで遡る宗教もある。即ち國家の生命は過去の歴史を重んじ、祖先以來傳へた文明を尊重するに在るが、此の心は遂には宗教心の一部分となるべき性質を持つて居る。又國家の將來

國家の生命と信仰の力

に對する理想希望も、宗教の信仰で與ふる理想と關係を絶つ譯に行かぬ。現在の生活に於ても、人民の幸福と、其の精神的安立とは密接な關係を有して來る。斯く極めて概括的に説いても、國家の性質と宗教の内容とは、密接に相影響する様になつて來る。

如何なる世界的宗教でも、其の信者が、歴史あり理想ある國家に屬する限は、其の理想を尊重し、發揚して行かなくてはならぬ。是が即ち宗教の國家に同化し適應すべき所以であるが、さればとて此の同化適應といふは、必ずしも宗教が其の理想を棄て、國家に降參するの意ではなく、宗教の信仰理想に依り、國家の歴史に深い意味を發見し、以て國家の理想を高くし、又清めるので、是が宗教の本分である。如何なる世界的宗教でも、此の同化適應即ち國家理想の發揚を爲し得ぬもの下あるならば、それは應て感化の實力の無い宗教である。例へば日光は萬古に通じ世界に亘つて同じ光であるけれども

國家に對する宗教の本分



それが草木を照らしては、梅は梅、桃は桃の成長をさせる。是は一面からいへば、日光が梅桃乃至千百種の草木に適應する爲めで、其れが草木の種を成育し、其の成長を發揚する所以である。此點を又反對に國家本位で考へて見ても國家が宗教の信仰に依つて、其の理想を發揚し發達せしむればとて、國家の特色を棄て、漠然たる世界的宗教に降參するのではない。歴史と理想とを守りつゝ、其の理想を高め發達を盛にする爲めに、千古に通じて變らざる力を吸収するまでの譯である。若し梅や櫻が、日光の力を借りては意氣地がないとて、故らに日光の無い處に成長しやうとすれば、所謂日蔭の植物で生氣のないものとなる。國家の宗教に於けるも亦是と同然で、其の國內に出た者にせよ、將た他國から來た者にせよ、世界的の勢力ある理想信仰をばドシ／＼取り入れて、之を國家の力と爲すべきは當然である。即ち植物の日光に浴すると同じである。今の日本には、日本固有の道といふ點だけを重ん

國家の宗  
教に對す  
る態度

じ、如何なる思想、信仰でも外來のものといへば、之を拒絶せんとする氣風がある。其の爲めに、日本元來の精神や過去の歴史に含まれ居る、大切な又深奥な意味をも發見する力を失ふ。此様な鎖國主義は、日本國の文明をして全然日蔭の植物たらしめんとするもの。日本國の文明、理想から出た道にして、若し雄大に且つ普遍なる感化力を有するものがあるならば、其の文明や理想が世界的宗教と握手し共同し得ざる理由はない。勅語でいへば、それに宣せられた人倫、道德、忠孝の道、建國の威徳は、勿論皇祖皇宗の遺訓に基いて居る、即ち皇室を中心とした日本の歴史が事實的(單に理論ではなく)證明となつて居る。けれど國家の理想、國民の踐むべき道は、又同時に中外に施して悖らす、古今に通じて謬らざる道である。已に中外に施して悖らざる以上は、又内外古今の別を問はず、此の道の精神を發揮し得た宗教信仰があれば、それから光を得、滋養分を吸収して、盛に成長を遂げしむべきである。



斯く見て來れば、國家と宗教信仰との關係は、單に制度や團體の表面的問題でなく、精神理想の實質に關係する大切の問題である。制度組織の上ですら、分離といふのは、多くの論者の考ふるが如き簡単な問題でない。分離の形式を取つて、それが背反嫉視に陥る如きは、一國の不幸であつて、殷鑒は遠からずフランスに在る。況んや理想信仰の實質に就いて、考へて來れば、國家と宗教とは、各其の活動の範圍方面を別にするにせよ、精神上には少くも相携ふべきである。猶ほ植物の成長と日光の照臨とは、明に區分あるにもせよ、兩者の遂に相分つべきにあらざるが如きものである。床次氏の宣言中に在る國家と宗教との契合といひ、又日本宗教の世界的思想といひ、何れも此の點より見て解釋すべきものであらう。要するに、日本の思想家、評論家は、今まで宗教問題に冷淡であつた爲め、他國の政教關係に就いても、解釋が粗漏で、僅に分離の一語で解釋を盡し得たと思惟するのであらうけれど、此の如

く簡単な考へで、國家に大切な問題を斷定するのは、頗る輕卒且つ危険な事である。(序でに言つて置くが、教育と宗教との關係に就いても、イギリスでも困難を感じ、嘗て菊地男爵に日本の教育に關する講義を頼んだ時、日本の教育家は、イギリスも亦、宗教と教育との分離をする事と考へて居た處、イギリスは全然反對の解釋を採り、各學校には凡て其の設立者の宗教を入れ、國家は何れの宗派のものとも雖も、平等に保護する事とした。此の一事でも日本の論者の思想の餘り形式的に、且つ簡單過ぐることを示して居る。實質の解釋は各其の國々に特別の點があり、單に分離が何れの國にも通じた文明的方針だとはいひ難い)。

以上問題に就いて、両面から大體の解釋を述べたのだが、終に此の問題に就いての由來を考へて見ねばならぬ。西洋の諸國、特にフランスやイタリヤに、政教分離の歩を進めて來たのは、特別の必要から出た事である。即ち中



世紀以來、教會の勢力が凡ての方面に及び、政治教育のみでなく、研究や思想の自由にまで立ち入り過ぎた。此等の國での政教分離は、要するに政府が教會の壓制を脱せんとする努力に外ならぬ。(此點に就いてはイタリヤの元老ルツアツテ氏が「信教と研究の自由」と題するものを出版し、之を日本にも翻譯することを私に頼まれたから、近い中に翻譯を出版して世に示さう。)それ故イタリヤやフランスで、分離の必要を感じ、遂に分離したからとて、直にそれが日本の標準となるものでない。日本には、却て其の反對の事情のあることを思はなくてはならぬ。イタリヤやフランスは、教會の壓抑より脱する爲めに、又教會の勢力を反撥する爲めに、遂に宗教を無視する極端に走りつゝあるが、是は反動の政策であるから、應て反動時代が終れば、元の中正に復し、國家と宗教とが互に相尊重し、相和合する時代が来るに相違ない。イタリヤの上院議員で小説家であるフナガツツアロの如きは、此の理想を以て進

政教關係  
の將來

日本の事  
態

み、イタリヤの思想界には隱然たる勢力を占めて居る。今日はそれが事實に現れぬにせよ、其の端緒だけは已に見えて居る。フランスはまだ、其處まで行つて居ぬけれども、今後のフランスの繁榮には、此の問題の解釋が至大の關係を有して居る。右は外國の事だが、扱て翻つて日本の事情を見るに、イタリヤやフランスとは全然反對である。即ち我徳川時代では、却つて宗教を政府の奴隸とし使役して來て居る。そして維新の際には、其の奴隸たる宗教を、全然國家の中より逐ひ出さうとした。が全然逐ひ出す事は出來ず、厄介者の居候を扱ふ様にして、今日まで及んだ、其の爲めに國家の損を招いた事は諸方面に現はれて居る。今日教育界に德育に就いての難問があるのも、一部分は此の宗教無視の結果である。(勿論經濟其他の諸種の社會問題があるには相違ないけれども)。それが爲めに宗教の感化と國民の理想に對する進歩とが相離隔し、教育と宗教との分離の必要あるにもせよ、分離が應て背反となり、



教育家と宗教家とは疎遠となる一方で、國民の義務教育と、社會に出てからの感化とは甚しき扞格を生ずる。國民の信仰感化に就いて、政府は少しも干渉してならぬといふならば、教育事業も政府でせぬ方が正當となる。けれど政府の仕事は、國利民福を増す爲に、即ち國家の文明を發達し、理想に向つて進む一部の働をする以上は(但し政府のみが之をしようと誤解してはならぬ)政府も宗教の感化力を全く度外に附すべきでない。既に監獄教誨、軍隊布教、從軍布教など、政府は從來宗教の活動を許すのみならず、又それを懸望した事もある。是は決して不當の事でない。政府は主として行政、司法の手段に依り、宗教は其の感化に依り、共に俱に國家の爲めに盡す以上は、其の間全く没交渉たる事は、如何しても出来ぬ。例へば從軍布教の如き、戰爭中は佛教やキリスト教の事業を陣中で歓迎し、其の効力を認めたと拘らず、戰爭が濟めば宗教は再び元の繼子扱食客扱に附して顧みなくても宜いといふのは、餘りに

輕薄な見方であつて、國民の志氣を常住に堅實にする所以でない。何れにしても、政府と宗教とは、共に國家の文明を發達する爲めに働くものである以上、其の間に意思の疏通と、或る點の打合せ、又活動の調和がなくてはならぬ。勿論双方其の區域を明にし、分業して進まなければならぬのであるが、分業といふは分離背馳でない、相互の調和協同である。世人は此の分業を分離と考へ、又分離といふ事に就いても深く内容を考へないで、それで床次氏の計劃を見るから、意味を誤解し邪推し、愚論を持ち出すのである。

誤解に就いて尙ほ一言ふべきは、國家と宗教との契合といふに就いてである。國家と宗教とが目的を同うして共に助けるといつても、直にそれが政教一致であつて、政府が何か一の宗教を作り出し、又は何れか一の宗教を特に保護して、他の異端邪説を排斥するといふが如き意味でない。何となれば如何なる迷信又は幼稚なる宗教でも、兎に角それが今の世に行はれるのは、

結合と分  
業と自然  
淘汰



まだ其位の程度の信仰で満足する人民の存在する證據である。其の人心を動かすことは政府の力でなし得るものでない。人を感化するは人、心を動かすものは心だから、此等の信仰上の淘汰作用は、各宗教の自由なる活動、従つて又信仰の切磋琢磨で處置し行くべき問題である。それ故今度の問題に關聯して、何か國教風のものを作り出し、他を壓迫するといふが如きは、勿論あるべからざる事、又試みたからとて出来るべき話でもない。各宗教が各其力を發揮し、自由に感化を及ぼす様にならなくてはならぬ。今までは繼子扱の結果として、此點に詰らぬ干渉や妨害が事實行はれて居たが、それを撤去すれば、各宗教は其の力に應じて人心を感化し、其間に所謂自然淘汰を生じ、劣等の宗教は高等な方に引上げらるゝ方に近づくに相違ない。即ち國家と宗教との契合といふのは、今迄の世界に無かつた政教一致ではなく、自由活動を許しての分業である。

尙ほ又國家の事業と宗教の感化との關係について、實際の方面から考へて見るに、現在の社會は、學校の教育以外に實に徳教感化の必要に迫られつゝある。或る人は青年會や何かを學校教員で擔當し、又補習教育を義務的に延長して、この缺陷を充たさうといふ提案をして居る。此の如きは一小部分で行はれることであつても、國として大體に之を遂行する事は出來ず、又之を實行する上で小學教員の餘力と學力と思想とが之に堪へるや否や、大なる疑問として殘る。此の如き補習的教育感化を十分に行ふには、又それだけの設備と準備とを要するところであるが、この準備として宗教家に一定の訓練を與へる方が遙に上策である。此は實際問題として、單に設備の上での話しであるが、人心の内容に入つて、宗教的感化は事實一般社會には實力として存在し、(それが又迷信の流行として發表するが)、而して今日の師範教育ではこの需



要に應じ得ないことは明白である。

或は又、教育社會に行はれて居る意見として、日本人は元來現實的の人民で宗教の必要は無い、殊に教育は勸語を主義として宗教を離れて居るから、今後益々宗教の必要は減じて来る。夫れ故凡ての政治に於て、宗教を眼中に置かぬやうにするのが、至當な事であると論斷する人があり、今回の問題に關聯しても此の論法は現れて居る。元來日本人が宗教的であるか無いかの問題は、姑く別の研究に任して置いて、事實今日の社會には、殊に教育の及ばぬ下層社會があり、又た地方農民の間などには、宗教の勢力感化と云ふものが事實非常に存在してるとを看過してはならぬ。それに加へて學校教育以外に、一般に社會的若くは精神的教育の必要を感ずるとの最も多い種々の團體がある。たとへば工場、鐵道、郵便、鑛山の如き、それ等の間に感情を融合する分子の缺けて居るのは、少くとも具眼者の認めて居る所であらう。又た

其の方面に於て監督者の側でも、勞働者自らの側に於ても、精神上の修養、或は宗教的の信仰を要求して居るのも争ふ可らざる事實である。是はいくら教育が普及しても、今日の教育社會では此の方面に於ける感化を全然負擔して行くとは到底出來ない。而して此方面の需要を、少しづつでも充たして行つて居るのは、事實に於て宗教家なのである。然らば日本人元來の精神とか、或は近世文明が十分咀嚼された後とか、兎に角是から先の問題は暫く別として、現在に於て宗教的感化を活用し、又は擴張して行くと云ふ事は、事實必要問題である。

然るに日本の宗教は宗派の分立が烈しい爲めに、教理信仰の上で分れるよりも、——勿論それもあらうが、先づ組織の上に分離不秩序を來して居る。宗教自己の立場から云へば、各宗各派各々其の主義特徴があるのだから、其の特徴を發揮する必要がある。勿論各宗の合同など望むのは人工的方法で



は如何にしても出来るものではない。併しながら、宗教の傳道或は社會全般に亘つた感化救済の上で、或る定まつた組織の上に、聯合或は打ち合せをすると云ふ事は、極めて必要なことである。たとへば或る鐵道驛で、其の従業員を集めて、半ば娛樂を與へ、半ば修養上の談話を聞かせるなど云ふ事も、處々にあるが、それは驛長が各々自分の考へで組織し、又た談話をする人を一々頼んで廻るやうな状態である。此の點に於て何れの方面からも、非常な不便と面倒を來して居る。それで例へば此度の會合の如きものが出来るならば、其間に宗教家の打合せが出来て、内務省が其の周旋案配をする機關となり、それ等のものを、政府と宗教家との協力で、組織あり統一ある方に向けることが出来るであらう。たとへば事實の上で本願寺は監獄教誨師を最も多く出して居るが、自派だけで監獄教誨師の連合會を開いて居る。曹洞宗は亦た軍隊布教師を最も多く出して居て、年に一回づゝ其人等の打合せ並びに講習

會を開いて居る。内務省では感化救済事業の講習を開き、司法省では監獄協會の講習を別に開いて居る。此の外此の類の事が澤山ある。斯うした色々なものを個々別々にせずに、其の間に連絡組織を付け、且つ又た教誨布教に従事する人々の間に打合せ、研究或は懇親の會合を開くやうにすれば、是等の各方面の感化事業に、多少の統一を得て來ることになるであらう。今回の三教會同はこゝまで運ばなかつたが、此は無理もない次第であつて、今まで疎遠になつて居た政府と宗教との間に、又随分敵視もし互に誤解もして居た三教の間に、第一會から直に實際の効果を生じやうと云ふのは、無理の注文たるは明白である。提案者たる床次氏も、勿論始めから之を自覺しての事であつて、その宣言第二の六項に明言して居る。『思ふに斯かる會合に依つて仕事をなすなどいふは、二回三回と幾多の會合を重ね、互に意志の疏通を得たる後の事に屬し、今日に於て多きを望むは、望む者の誤なり』。



三教會同の觀察

そこで今年の會合は、云はゞ公式に、三教執政側の代表者が集まり、政府側からは、『世運の進歩と共に、精神界の健全なる發達を計り、社會狀態の改善をなすことに關して』宗教家の盡力を希望し、又之に依頼することを表明し、三教の人々は、皆共に『皇運を扶翼し、時勢の進運に資け』て、『國民教化の大任を完うせんことを期する』旨を宣明した。此等の會合や宣言決議に對して成るべくけちを附けやうとする惡罵冷評には關しないで、此れだけでも明治の歴史に於ける政教關係の大切な事實ではあるが、此の公式の意志疏通と決議とは、それだけで濟むべきでないことも亦明白である。即ちこの趣意を貫徹するために、各宗教と政府とが各々その立場から研究し實行すべきことは益々多くなつた譯であるが、それはその方に一任して、それと共に又官民の別なく、宗派の別以上に、國民として共同にこの目的のために研究し畫策すべきことは、公明に一般の自由討議と、各自の經驗なり希望なりを合はせ

て、段々に結果を得る覺悟をしなければならぬ。是れ實に三教會同の實質問題に進む所以であつて、又眞に東西の文明を合はせて、新機運の國家統一に向つて、精神上の内容を提供する所以である。

そこで今後、公式の會同や、各宗内部の討議は、各々その人に委することにし、一般國民の側でこの實質の釋解する所以として宗教教育大會を開くことを提議する。その内容の詳細は後日の問題として、大體の輪廓を此處に述べて見れば、左の如きものにしたがよからう。

- 一、毎年四月上旬を期し、約一週間の會期を以て、日本宗教教育大會を開く。
- 二、大會の會合を左の六部に分ち、別に總會を開く。
  - 一、日本思想史(宗教、道德、法制に亘りて)。
  - 二、現代思想(思想問題として文藝經濟をも含む)。



